

41639

教科書文庫

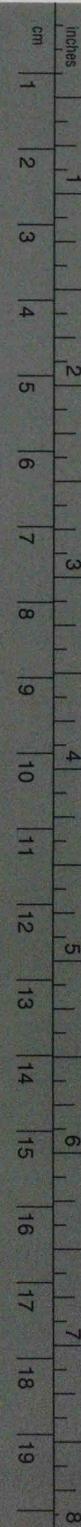
4
810
41-1925
20000 42080

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



修訂新撰高等讀本 全



4

5

6

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

375.9
5219

修訂新撰高等讀本



東京 株式会社 明治書院



文學博士佐々政一編 明治書院
編輯部補修

例 言

一、本書は中學校補習科程度の教科用として編纂したるものなり。されば中等教育程度の國語科の溫習に便利にして、兼ねて高等諸學校の入學試験の準備に適切ならむことを主眼とせり。

二、本書は如上の目的により、古今の名ある著述の中より最も重要にして必讀の價値あるもの十數種を擧げ、就中その文體と語句とに特色ある文章を選びたり。故に既習の文法・語彙などを溫習し、之を確實に記憶せしむると共に、國文解釋に關して明瞭にして進取的なる頭脳を修養せしむるを得べし。

三、本書は古今の名著より抜萃するに方り、それ等の序及び跋をも採録せり。そは、選出したる最も注目すべき内容と併せて、其等の序及び跋を讀むことは、啻に學修上有益なるのみならず、多大の興味もある。

べく、且つ勉學に餘暇なき青年學生をして、僅少の時間に於て名著の輪郭を知らしむるに效果ありと信じたればなり。

四、頭註は稀には故事の出典を明かにし或は人名を示したものなどあれど、大部分は特に注意すべき語句の摘記なり。然れども、注意すべき語句の選擇に關しては、教授者各箇の意見あり、取捨あり、秩序あるべきものにして、或は編纂者の豫定すべきものには非ざるべし。されど、温習自學する人にこりては、研究の標的として、かかる摘記は極めて有意義なりと信ずるが故に、力めて多く之を標出せり。摘記の中には、相類似せる語句、又は全然同一なる語句をも、或は前後の關係上惑ひ易きがため、或は特に注意を新にするため、二箇所以上に出せるものあり。要するに總べて編纂者の婆心に出づ。見む人、之を諒させられむことを希望す。

大正十三年五月

修訂新撰高等讀本 目次

〔徒然草〕

一、あだし野の露	一
二、飛鳥川の淵瀬	二
三、よろづの事は頼むべからず	三
四、大事を思ひ立たむ人	四
五、弓射ること	五
六、花はさかりに	六
七、さしたる事なくて	七
八、人の物を問ひたるに	八
九、同じ心ならむ人	九
一〇、入りたぬさま	一〇
一一、物に争はず	一一

- 一二、雪のあした 三
 一三、主ある家には 二
 一四、よろづの道の人 一
 一五、世に語り傳ふること 一

方丈記

- 一、逝く川の流 六
 二、大原山の雲 七
 三、末葉のやどり 元
 四、手の奴足の乗物 三
 五、閑居の氣味 二十五

千訓抄

- 一、序 六
 二、可誠三人上多言等事 三〇
 三、可彌庶幾才能藝業事 三一

増鏡

- 一、序 三
 二、鎌倉三代 七
 三、承久のみだれ 四
 四、新島守り 五
 五、むら時雨 六
 六、隱岐より 七
 七、都のさわざ 八

神皇正統記

- 一、正道 七
 二、聖代 七
 三、泰時論 七
 四、人臣の道 六

駿臺雜話

- 一、自序 八
 二、年にはづかし 七

- 三、朝顔の花 一時 九〇
 四、壬子試筆の詞 九〇
 〔玉かつま〕 九五

一、わすれ草 九四

二、花の雪 九五

三、めづらしき書 九五

四、新なる説を出すこと 九七

五、世の常にことなる新しき説 九九

六、道にかなはぬ世の中のしわざ 一〇〇

七、富貴を願はぬ儒者 一〇一

八、世の物知り人 一〇一

九、兼好法師が詞のあげつらひ 一〇四

一〇、物學ぶともがら 一〇六

一一、わが弟子に諭す 一〇七

一二、述懷 一〇八

一三、手書くこと 一〇九

一四、人の善惡 一〇九

一五、つらつら椿 一一〇

〔琴後集〕

一、隨時樓の記 一一一

二、知足庵の記 一一三

三、山里に花を見る 一一五

四、八月十五夜の疊れる月 一一六

五、わざと法と 一一七

〔荒が花〕

一、泊酒舍にて蓮を見る 一一九

二、山里の月 一二〇

〔泊酒文藻〕

一、砧を聞く 一二一

二、筆の跡を見て亡き人を偲ぶ 一二二

一、春月	二五
二、夏草	二六
三、漁邨	二七
四、夜學	二八
五、幽夕	二九
六、山家興	三〇
七、書	三一

〔藤籜冊子〕

一、仲秋	三三
二、聽雪	三四
三、古戰場	三五

〔奥の細道〕

一、逝く春	三四
二、那須野の原	三五

〔鶴〕

三、平泉	三四
四、月山	四五
五、北國日和	四六

〔衣〕

一、奈良團扇の贊	五一
二、長短の解	五二
三、乞食畫の贊	五三
四、自ら名づく	五四
五、節分の賦	五六
六、蟬の引	五六
七、臍の頌	五六

〔現代文〕

一、平重盛論（高山樗牛）	一六〇
二、文化の餘弊（大町桂月）	一六一
三、大道闊歩（徳富蘇峰）	一七〇

- 四、長語（幸田露伴）……………一五
五、病牀の花（夏目漱石）……………一六
（終）



訂新撰高等讀本

〔徒然草〕

つれづれなるままに、日ぐらし硯にむかひて、心にうつりゆくよ
しなしごとを、そこはかとなく書きつづくれば、あやしうこそ物ぐ
るほしけれ。

一 あだし野の露

あだし野の露きゆる時なく、鳥部山の烟たち去らでのみ住みは
つる習ならば、いかに物のあはれもなからむ。世は定めなきこそい

一 あだし野の露

あだし野の露きゆる時なく、鳥部山の烟たち去らでのみ住みは
つる習ならば、いかに物のあはれもなからむ。世は定めなきこそい

みじけれ。命ある物を見るに、人ばかり久しきはなし。蜉蝣の夕を待
ち、夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年をくらす
程だにも、こよなうのどけしや。飽かず惜しと思はば、千とせを過す
とも、一夜の夢の心地こそせめ。住みはてぬ世に醜き姿を待ち得て
何かはせむ。命長ければ恥おほし。長くともよそぢに足らぬ程にて
死なむこそ、めやすかるべけれ。そのほど過ぎぬれば、容を恥づる心
もなく、人に出でまじらはむ事を思ひ、夕の陽に子孫を愛して、さか
ゆく末を見むまでの命をあらまし、ひたすら世を貪る心のみ深く、
物のあはれも知らずなりゆくなむ淺ましき。

二 飛鳥川の淵瀬

飛鳥川のふち瀬、常ならぬ世にしあれば、時移り、事去り、樂しう悲
しひゆきかひて、はなやかなりしあたりも人すまぬのらとなり、か

はらぬすみかは、人あらたまりぬ。桃李ものいはねば、誰とともにか
昔をかたらむ。まして見ぬいにしへのやむごとなかりけむ跡のみ
ぞいとはかなき。

三 よろづの事は頼むべからず

よろづのことは頼むべからず。愚なる人は深く物を頼む故に、恨
みいかる事あり。勢ありとて頼むべからず、こはきものまづ亡ぶ。財
多しとて頼むべからず、時の間に失ひやすし。才ありとて頼むべか
らず、孔子も時にあはず。徳ありとて頼むべからず、顔回も不幸なり
き。君の寵をも頼むべからず、誅をうくること速かなり。奴從へりと
て頼むべからず、背き走ることあり。人の志をも頼むべからず、必ず
變ず。約をも頼むべからず、信あること少なし。身をも人をもたのま
ざれば、是なる時はよろこび、非なる時はうらみず。左右廣ければさ

こはきもの

やむごとなし

従へりとて
(従ふとて)

うらみず
(うらまづ)

はらず、前後遠ければ塞がらず、せばき時はひしげくだく。心を用ふる事少しきにしてきびしき時は、物にさかひあらそひて破る。ゆるくしてやはらかなる時は、一毛も損せず。

人は天地の靈なり。天地はかぎる所なし。人の性なんぞことならむ。寛大にしてきはまらざる時は、喜怒これにさはらずして、もののためにわづらはず。

現世ノ利欲ヲ捨て、生家入道スル

四 大事を思ひ立たむ人

ほい
さながら
おなじくは
さた
したためまうく
あればこそあれ
えさらぬ

大事を思ひ立たむ人は、さりがたく、心にからむことのほいをとげずして、さながらすつべきなり。しばしこの事はてて、おなじくばかのことさたしおきて、しかじかの事人の嘲やあらむ、ゆくすゑ難なくしたためまうけて、年ごろもあればこそあれ、そのこと待たむ程あらじ、物さわがしからぬ、やうになど思はむには、えさらぬ事

のみいとどかさなりて、事のつくるかぎりもなく、思ひ立つ日もあるべからず。

おほやう
心あるきは
あらまし
身をたすく
すみやかに
すみやかにし
て

おほやう人を見るに、少し心あるきはは、皆このあらましにてぞ一期はすぐめる。近き火などににぐる人はしばしとやいふ。身をたすけむとすれば、恥をもかへり見ず、財をもすててのがれ去るぞかし。命は人をまつものかは。無常の來ることは水火のせむるよりもすみやかにのがれがたきものを。その時、老いたる親、いときなき子、君の恩人の情、捨てがたしとて捨てざらむや。

五 弓射ること

もろ矢

ある人、弓射ることを習ふに、もろ矢をたばさみて的に對ふ。師の

曰く、「初心の人、二つの矢を持つこと勿れ。後の矢をたのみて、初の矢に等閑の心あり。毎度ただ得失なく、この一箭に定むべしと思へ。」と

いふ、僅に二つの矢、師の前にて、一つをおろそかにせむと思はむや。懈怠の心、みづから知らずと雖も、師これを知る。この誠、萬事にわたるべし。道を學する人、夕には朝あらむことをおもひ、朝には夕あらむことを思ひて、重ねて懇に修せむことを期す。いはむや一刹那のうちにおいて懈怠の心あることを知らむや。なんぞ唯今の一念において直にすることの甚だ難き。

六 花はさかりに

花はさかりに月は隈なきをのみ見るものかは。雨に對ひて月を戀ひ、垂籠めて春のゆくへ知らぬも、猶あはれになさけ深し。咲きぬべきほどの梢、ちり萎れたる庭などこそ見所おほけれ。歌の詞書にまかれりけるなぎも、(などとも)

花の散り月の傾くを慕ふならひはさる事なれど、殊にかたくなる人ぞ、この枝かの枝散りにけり。今は見所なし。などはいふめる。よろづの事も始終こそをかしけれ。

望月の隈なきを千里の外まで眺めたるよりも、暁近くなりて待ちいでたるがいと心深う青みたるやうにて、深き山の杉の梢に見えたる木の間の影、うちしぐれたる叢雲がくれのほど、又なくあれなり。椎柴・白檉などの濡れたるやうなる葉のうへにきらめきたること、身にしみて心あらむ友もがなと、都戀しう覺ゆれ。すべて月花をばさのみ目にて見るもののかは。春は家を立ちさらでも、月の夜は闇の内ながらも思へること、いとたのもしうをかしけれ。

七 さしたる事なくて

さしたる事なくて人のがりゆくはよからぬ事なり。用ありて行

人のがり

心づきなし
なかなか

阮籍
竹林七賢の一人

きたりとも、その事はてなばとく歸るべし。久しうゐたるいとむづかし。人とむかひたれば、詞おほく身もくたびれ、心ものどかならず。萬の事さはりて時をうつす。互のため益なし。いとはしげにいはむもわろし。心づきなき事あらむ折は、なかなかそのよしをもいひても。同じ心にむかはまほしく思はむ人の「つれづれにて、今しばしけふは心しづかに。」などいはむは、この限にはあらざるべし。阮籍が青き眼、誰もあるべき事なり。その事となきに人のきたりて、のどかに物語して歸りぬるはいとよし。又、文も「久しう聞えさせねば。」などばかりいひおこせたる、いとうれし。

八 人の物を問ひたるに

ことなり。知りたることも、猶さだかにと思ひてや問ふらむ。又まことに知らぬこともなどか無からむ。うららかにいひ聞かせたらむは、おとなしく聞えなまし。人は未だ聞きおよばぬことを、わが知りたるままに「さて、その人の事のあさましさ。」などばかりいひ遣りたれば、如何なる事のあるにかと、おし返し問ひに遭ること心づきなけれ。世に舊りぬる事をも、おのづから聞きもらすあたりもあれば、覺束なからぬやうに告げやりたらむ、惡しかるべきことかは。かやうのことは物馴れぬ人のあることなり。

九 同じ心ならむ人

おなじ心ならむ人としめやかに物語して、をかしきことも、世のはかなき事も、うらなくいひ慰まむこそそれしかるべきに、さる人あるまじければ、露たがはざらむと向ひむたらむは、ひとりある心

同じ心ならむ人

うらなく

いはむほど
ものから
さやは思ふ

地やせむ。互にいはむほどの事をばげにと聞くかひあるものから、いささかはたがふ所もあらむ人こそ、「我はさやは思ふ。」などあらそひにくみ、「さるからさぞ。」ともうちかたらはば、つれづれなぐさまめと思へど、げには少しかこつ方も、我とひとしからざらむ人は、大方のよしなしごといはむほどこそあらめ、まめやかの心の友には、廻りぬべし

(あるべし)

さのみ
さしいらへ
いみじ

一〇 入りたたぬさま

何事も、入りたたぬさましたるぞよき。よき人は、知りたる事とて、さのみ知り顔にやはいふ。片田舎よりさし出でたる人こそ、よろづの道に心得たる由のさしいらへはすれ。されば、世にはづかしき方もあるれど、みづからもいみじと思へるけしきかたくなり。よく辨へたる道には必ず口おもく、問はぬかぎりはいはぬこそいみじけ

れ。

一一 物に争はず

物に争はず、おのれを枉げて人に従ひ、わが身を後にして人を先にするにはしかず。よろづの遊にも、勝負を好む人は、勝ちて興あらむためなり。おのが藝の勝りたることを喜ぶ。されば、負けて興なく覺ゆべきこと、また知られたり。わが負けて、人を喜ばしめむと思はば、更に遊の興なるべし。人にはいなく思はせて、わが心を慰めむこと、徳に背けり。むつまじき中に戯ぶるも、人をはかり欺きて、おのが智の勝りたることを興とす。これ又、禮にあらず。されば、はじめ興宴よりおこりて、永き恨を結ぶたぐひ多し。これ皆争を好む失なり。人に勝らむことを思はば、只學問して、その智を人に勝らむと思ふべし。道を學ぶとなれば、善にはこらず、ともがらに争ふべか

ほいなし

らずといふことを知るべき故なり。大なる職をも辭し、利をも捨て
るは、只學問の力なり。

一二 雪のあした

人のがり
ひがひがし
をかし

雪のおもしろう降りたりしあした、人のがりいふべき事ありて文を遣るて、雪のこと何ともいはずりし返事に「この雪いかが見ると一筆宣はせぬほどの、ひがひがしからむ人の仰せらるること聞入るべきかは返す返すくちをしき御心なり」といひたりしこそをかしかりしか。今は亡き人なれば、かばかりの事も忘れたし。

一三 主ある家には

すずろ
(そぞろ)

主ある家には、すずろなる人、心のままに入りくることなし。主なきところには道行き人みだりにたち入り、狐・梟やうのものも、人げ

にせかれねば、ところえがほに入りすみ、こだまなどいふけしからぬ形もあらはるるものなり。我等が心に念念のほしきままに來り浮ぶも、心といふもののなきにやあらむ。心にぬしあらましかば、曾ましくそこばくの中にそこばくのことは入り來らざらまし。

一四 よろづの道の人

非家人
おろか
(おろそか)

よろづの道の人たとひ不堪なりとも、堪能の非家人に並ぶ時、必ずまさることは、たゆみなく慎みてからがろしくせぬと、偏に自由なるとの等しからぬなり。藝能・所作のみにあらず、大方の振舞心づかひも、おろそかにして慎めるは得の本なり、巧にしてほしきまなるは失の本なり。

一五 世に語り傳ふること

あいなし

いみじ
かたくな

おごめく

おほめく

あらがふ

いさ

世に語り傳ふる事、まことはあいなきにや、多くは皆そらごとなり。あるにも過ぎて人は物を言ひなすにまして年月すぎ、さかひも隔たりぬれば、いひたき儘に語りなして筆にも書きとどめねれば、やがて定まりぬ。道道の物の上手のいみじき事など、かたくなる人のその道知らぬは、そぞろに神の如くにいへど、道知れる人は更に信も起さず。音に聞くと見る時は、何事もかはるものなり。かつ顯るるも顧みず、口に任せていひ散すは、やがてうきたる事と聞ゆ。又、我もまことしからず思ひながら、人の言ひしままに、鼻のほどおごめきて、いふは、その人の虚言にはあらず。げにげにしく所所うちおぼめき、よく知らぬよしして、さりながらつまづま合せて語る虚言は恐しき事なり。わがため面目あるやうに言はれぬる虚言は、人甚くあらがはず。皆人の興する虚言は、一人さもなかりしものをと言はむも詮なくて、聞き居たる程に、證人にさへなされて、いとど定まりぬべし。ともかくにも虚言多き世なり。ただ常にある珍しからぬ事のままに心得たらむ。萬たがふべからず。下ざまの人の物語は耳驚く事のみあり。よき人は怪しき事を語らず。かくはいへど、佛神の奇特、權者の傳記、さのみ信ぜざるべきにもあらず。これは世俗の虚言を懇に信じたるもの、こがましく、よもあらじなどいふ詮なければ、大方はまことしくあひしらひて、偏に信ぜず、また疑ひ嘲るべからず。

をこがまし

あひしらふ

〔方丈記〕

一 逝く川の流

よどみ
うたかた
玉しきの
つきせぬ
（つきぬ）
多かれ
（多けれ）

逝く川の流は絶えずして、しかももとの水にあらず。よとみに浮ぶうたかたはかつ消えかつ結びて久しくとどまることなし。世の中にある人とすみかとまたかくの如し。玉しきの都の中に棟を並べ、甍を争へる、高き卑しき人のすまひは、代代を経てつきせぬものなれど、これをまことかとたづねれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年は造り、あるは大家ほろびて小家となる。住む人もこれと同じ。ところもかはらず人も多かれど、いにしへ見し人は三十三人が中にわづかに一人二人なり。あしたに死し、ゆふべに生るならひ、ただ水の泡にぞ似たりける。知らず、うまれ死ぬる人、いづ方より來りていづ方へか去る。又、知らず假の宿り、誰が爲に心を惱

無常

ありにくし
身數ならずして
「近勢家客
微身者、屋雖
垣雖壇不得
レ築、有樂不
レ能大開口
而咲、有哀不
レ能高揚聲
而哭、進退有
懼、心神不安、
譬猶鳥雀之
近鷹鶴矣。」
（本朝文粹）
權門
すほき姿

まし何によりてか目を喜ばしむる。その主とすみかと無常を争ひ去るさま、いはば朝顔の露に異ならず。あるは露落ちて花残れり、殘るといへども朝日に枯れぬ。あるは花は萎みて露なほ消えず、消えずといへどもゆふべを待つことなし。

二 大原山の雲

すべて、世のありにくきこと、我が身と住家とのはかなくあだなるさま、かくの如し。況や、處により身の程に隨ひて心を惱ますこと、あげて數ふべからず。もしおのづから身數ならずして、權門のかたはらに居る者は、深く喜ぶ事はあれども、大いに樂しぶにあたはず。歎ある時も、聲をあげて泣くことなし。進退やすからず、起居につけて恐れをののく。たとへば雀の鷹の巣に近づけるが如し。もし貧しくして富める家の鄰に居るものは、朝夕すほき姿を恥ぢて、詔ひつ

つ出で入る。妻子僮僕の羨めるさまを見るにも富める家の人の蔑なるけしきを聞くにも、心念念に動きて、時として安からず。もし狭き地に居れば、近く炎上する時その害を遁ることなし。もし邊地にあれば、往返わづらひ多く、盜賊の難離れ難し。勢あるものは貪欲深く、ひとり身なるものは人に輕しめらる。寶あれば恐多く、貧しければなげき切なり。人をたのめば、身他の奴となり、人をはごくめば、心恩愛につかはる。世に従へば身苦し、また従はねば狂へるに似たり。いづれの處をしめ、いかなるわざをしてか、しばしもこの身をやどし、たまゆらも心を慰むべき。

わが身、父方の祖母の家を傳へて、久しうかのところに住む。その後、縁かけ身衰へて、忍ぶかたがたしげかりしかば、遂に跡とむることを得ずして、三十餘にして更にわが心と一つの庵を結ぶ。これをありし住ひになづらふるに、十分が一なり。わづかについひぢをつ

たつき
あらぬ世
たがひめ
よすが

けりといへども、門たつるにたつきなし。竹を柱として車やどりとせり。雪降り風吹く毎に危からずしもあらず。處は河原近ければ、水の難も深く、白浪の恐も騒がし。

すべてあらぬ世を念じすぐしつつ、心をなやませることは三十餘年なり。その間、折折のたがひめに、おのづから短き運を悟りぬ。すなはち五十の春を迎へて、家を出で世をそむけり。もとより妻子なければ、捨て難きよすがもなし。身に官祿あらず、何につけてか執をとどめむ。空しく大原山の雲にいくそばくの春秋をか經ぬる。

三 末葉のやどり

爰に六十の露消え方に及びて、更に末葉のやどりを結べることあり。いはば、狩人の一夜の宿を作り、老いたるかひこのまゆをいとなむが如し。これを中頃のすみかになづらふれば、又百分が一にだ

土居

すのこ
閑伽棚
眉間
障子
抄物

にも及ばず。とかくいふ程に齡はとしどしにかたぶき、すみかは折にせばし。その家のありさま世のつねならず、ひろさはわづかに方丈、たかさは七尺がうちなり。處を思ひ定めざるが故に、地を占めて造らず。土居をくみ打ちおほひを葺きて、つぎめ毎にかけがねをかけたり。もし心に適はぬ事あらば、やすく外に移さむがためなり。その改め造る時いくばくの煩がある。積む所わづかに二輛なり。車の力をむくゆる外は、更に用途いらず。

いま日野山の奥に跡をかくして、南にかりの日がくしをさし出して、竹のすのこを敷き、その西に閑伽棚を作り、中には、西の垣にそへて阿彌陀の畫像を安置し奉り、落日をうけて眉間の光とす。彼の帳のとびらに、普賢ならびに不動の像をかけたり。北の障子の上にちひさき棚をかまへて、黒き皮籠三四合を置く。すなはち和歌管絃・往生要集ごときの抄物をいれたり。傍に琴・琵琶おののおの一張を立

ほぎろ
つかなみ
すびつ
ひめ垣爪木
跡をうづむ

ちぎる

憐む

まめ
つべし
(ぬべし)

ついはゆる折り琴・つぎ琵琶これなり。東にそへて蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の牀とす。東の垣に窗をあけて、爰に文机を出せり。枕のかたにすびつあり、これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に少地を占め、あばらなるひめ垣をかこひて園とす。すなはちもろもろの薬草を栽ゑたり。假の庵のありさまかくの如し。

その所のさまをいはば、南に窓あり、岩をたたみて水をためたり。林、軒近ければ、爪木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正木のかづら跡をうづめり。谷しげけれど西は晴れたり、觀念のたより無きにしもある。春は藤波を見る、紫雲の如くして西の方に匂ふ。夏は時鳥を聞く、かたらふごとに死出の山路をちぎる。秋は日ぐらしの聲耳に満てり、空蟬の世を悲しむかときこゆ。冬は雪を憐む、積り消ゆるさま罪障に譬へつべし。もし念佛ものうく讀經まめならざる時は、みづから休みみづから息るに妨ぐる人もなく、又恥づべき友

口業

跡の白浪
世の中は何か常
なる・朝びらき
漕ぎ行く舟のあ
との白波。(満誓
沙彌)

もし……あれは

もなし。殊更に無言をせざれども、ひとり居れば口業をさめつべし。
かならず禁戒を守るとしもなけれども、境界なれば何につけて
か破らむ。もし跡のしら浪に身をよする朝には、岡の屋に行きかふ
船をながめて満沙彌が風情をぬすみ。もし桂の風葉を鳴すゆふべ
には、濱陽の江をおもひやりて源都督のながれを微ぶ。もしあまり
の興あれば、しばしば松のひびきに秋風の樂をたぐへ、水の音に流
泉の曲をあやつる。藝はこれつたなけれど、人の耳を悦ばしめむと
にもあらず、獨りしらべ獨り詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

四 手の奴、足の乗物

あからさま

大かた此處に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今まで
に五年を経たり。假の庵もややふる屋となりて、軒には朽葉深く、土
居に苔むせり。おのづから事の便りに都を聞けば、この山に籠り居

やむこなし

いくそばく
(くはく)
ほぞ狹し

がうな

知れれば

眷屬

て後、やむごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。ましてその數
ならぬたぐひ、盡してこれを知るべからず。たびたびの炎上にほろ
びたる家またいくそばくぞ。ただ假の庵のみのどけくしておそれ
なし。ほど狭しといへども、夜臥す牀あり、晝居る座あり、一身をやど
すに不足なし。がうなはちひさき貝をこのむ、これよく身を知るに
よりてなり。みさごは荒磯に居る、即ち人を恐るるが故なり。我また
かくの如し。身を知り世を知れれば、願はずまじらはず。ただ靜なる
を望とし、愁なきを樂しみとす。總て世の人の住家を作るならひ、か
ならずしも身のためにせず。或は妻子・眷屬のために作り、或は親
昵・朋友のために作る。或は主君・師匠および財寶・馬牛のためにさへ
これをつくる。我今身のためにむすべり、人のために作らず。ゆゑい
かんとなれば、今の世のならひ、この身のありさま、ともなふべき人
もなく、たのもべきやつこもなし。たとひ廣く作れりとも、誰をやど

し、誰をかすゑむ。

それ、人の友たる者は、富めるを貴み、懇なるを先とす。かならずし
も情あると直なるとをば愛せず。ただ絲竹・花月を友とせむにはし
かず。人の奴たるものは、賞罰の甚しきを顧み、恩の厚きを重くす。更
にはごくみあはれぶといへども、やすく閑なるをば願はず。唯わが
身をやつことするには如かず。もしなすべきことあれば、則ちおの
づから身をつかふ。たゆからずしもあらねど、人をしたがへ人をか
へりみるよりはやすし。もしありくべき事あれば、みづから歩む。苦
しいへども、馬鞍・牛車と心を惱ますにはしかず。今一身を分ちて
二つの用をなす、手のやつこ、足の乗物、よくわが心にかなへり。心ま
た身の苦しみを知れれば、苦しむ時はやすめつ、まめなる時はつか
ふ。つかふとてもたびたび過さず、ものうしとても心を動かす事な
し。いかに況や、常にありき常に動くは、これ養生なるべし。何ぞいた
ものうし

ねんごろ
顧み
恩の厚きを重く
す
はごくむ
(はぐくむ)

たゆし

ものうし

はた
まだし
一期
うたた寐
おのづから

はた
づらにやすみ居らむ。人を惱ますはた罪業なり、いかが他の力をか
るべき。

おほかた、世を遁れ身を捨てしより、恨もなく恐もなし。命は天に
まかせて、惜しまず、厭はず。身をば浮雲になづらへて、頼まずまだし
とせず。一期の樂しみはうたた寐の枕の上にきはまり、生涯の望は
折折の美景に殘れり。

五 閑居の氣味

それ、三界はただ心一つなり。心もし安からずば、牛馬・七珍も由な
く、宮殿・樓閣も望なし。今、淋しきすまひ、一間の庵みづからこれを愛
す。おのづから都に出でては、乞食となれることを恥づといへども、
歸りてここに居るときは、他の俗塵に著することをあはれぶ。もし
人このいへることを疑はば、魚鳥のありさまを見よ。魚は水に飽か

三界
欲界・色界・無色
界。

おのづから

ず、魚にあらざればその心を知らず。鳥は林を願ふ、鳥にあらざればその心を知らず。閑居の氣味も亦かくの如し。住まずして誰か悟らむ。

三途の闇
かこつ
執心
あたら

そもそも、一期の月影傾きて、餘算山の端に近し。忽に三途の闇に向はむ時、何のわざをかかこたむとする。佛の人を教へ給ふ趣は、事にふれて執心なけれとなり。いま草の庵を愛するも科とす、閑寂に著するも障なるべし。いかが用なき楽しみを述べて、空しくあたら時を過ぐさむ。

ひじり
淨名居士
維摩詰のこそ、
釋迦ご同時代の
人にて方丈の庵
に起臥せりとい

靜なる曉、この理を思ひつづけて、みづから心に問ひていはく、「世を遁れて山林にまじはるは、心を修めて道を行はむためなり。然るを、汝が姿はひじりに似て、心は濁にしめり。住家はすなはち淨名居士の跡をけがせりといへども、たもつところはわづかに周梨槃特が行にだにも及ばず。もしこれ貧賤の報のみづから恼ますかはた

ふ。
周梨槃特
釋迦の弟子中第
一の愚者。
建暦二年
順徳天皇の御代、
蓮胤
鴨長明の法號。

又、妄心の到りて狂はせるか。」その時、心更に答ふることなし。ただ傍に舌根をやとひて、念佛兩三返を申して止みぬ。時に建暦の二とせ彌生の晦日ごろ、桑門蓮胤、外山の庵にしてこれをしるす。

〔十訓抄〕

一序

夫れ世の中にある人、ことわざしげきふるまひにつけて、貴き賤しき品をわかたず、賢なるは得多く、愚なるは失多し。しかるに、今、何となく聞き見る所の昔今の物語をたねとして、よろづの言の葉の中より、聊かその二つの跡を取りて、よき方をばこれをすすめ、あしきすぢをばこれを誠めつつ、いまだこの道を學び知らざらむ少年のかがみずをばこれをして、心をつくる便りとなさしめむがために、試に十段の篇を分ちて、十訓抄と名づく。すなはち三卷の文として、三餘の窗に置かむとなり。其の詞、和字をさきとして、必ずしも筆のつひえをかがみず見るものの目安からむことをおもふ故なり。其の例漢家をついでとして、博く文の道を訪はず。聞くものの耳近からむこと

かがみず
ついで

三餘の窗

道傍の碑文
風月の望
絲竹の曲

口業

諸法實相

讚佛乘

をおもふ故なり。すべてこれをいふに、空しき詞をかざらず、ただ實のためしを集む。道の傍の碑の文をばこひねがはざる心なり。但しつたなき身を顧みるに、秋の螢の光を聚めずして、風月の望にくらく、春の鶯のさへづりをまねばざれば絲竹の曲にうとし。藝なく能かけたり。なす事なくして徒にあまたの露霜を送るばかりなり。かかるにつけては、もしほ草、かきあやまれる言のはも數つもり、梓弓、引きみむ人の嘲もはづれがたく覚えながら、志のゆくところ、ただにはいかがやまむとてならし。抑、かやうの手すさびの趣を思ふに、口業の因をはなれざれば、賢良の諫にもたがひ、佛教のをしへに背けるに似たりといへども、靜に諸法實相の理を案するに、かの狂言綺語の戯、かへりて讚佛乘の縁たり。いはむや、またおごれるをきらひ、直しきをすすむるは、おのづから法門の心に相協はざらむや。かたがた何の憚かあらむ。これによりて建長四とせの冬、神無月の半

蓮の臺

のころ、おのづから暇あき、心間なる折節にあたりつつ、草の庵を東山の麓にしめて、蓮の臺を西土の雲に望む翁念佛のひまにこれをしるし終ることしかりとなむいへる。

二 可誠人上多言等事

短き
難す
あるまじき
さらてだに
不覺

或人いはく、人は慮なく、いふまじき事を口とくいひ出し、人の短きを譏り、したることを難じ、隠すことを顯し、恥がましきことをただす、これらはすべてあるまじき業なり。われは何となく言ひちらして思ひも入れぬほどに、いはるる人は思ひ詰めて、憤深くなりぬれば、はからざるに恥をも與へられ、身のはづる程の大事にも及ぶなり。ゑみの中の劔は、さらでだにも恐るべき物ぞかし。又よくも心得ぬ事をあしざまに難じつれば、却りて身の不覺あらはるるものなり。大方、口軽きものになりぬれば、某にその事な聞かせそ、彼の者

心をおかる
かたがた
にな見せそなどいひて、人に心をおかれ隔てらるる、口惜しかるべし。又人のつつむ事の自らもれ聞えたるにつけても、かれはなししなど疑はれむは面白なかるべし。しかれば、かたがた人のうへを慎み、多言を止むべきなり。

三 可庶幾才能藝業事

その道道の家
さる事なり
ほごほごにつけ
おろそかにして
けぢめ
うちある
われごちの遊
かたへ

或人いはく、本來その道道の家に生れぬるはさる事なり、さなき類も、ほどほどにつけて、能は必ずあるべきなり。中にも、氏をうけたる者、藝才能おそかにして、氏をつがぬ類あり。道にあらざる類能によりて道にいたる徳もあれば、氏をつがむがため、道に至らむがために、かれもこれもともに勵むべし。何となくゐまじりたる折は、そのけぢめ見えざれども、藝能につけて召出されただうちあるわれどちの遊にも、かたへにぬけいでて何事をもしたらむは、雲泥の心

いみじ
思ひけつ
さめたれども
桃李云云
李白の長歌行、
白樂天の放言な
ぎに見ゆる詞
けぢめ
いかにいはむや

地して人目いみじく覺えぬべし。すべてみめよく品高けれども、あ
やしく賤しきが能あるに立並ぶ折は、その品そのみめも必ず思ひ
けたるるものなり。たとへば花のあたりの常磐木は、打見るにたと
しへなくさめたれども、春の日數くれ、峯の嵐過ぎたる後に、縁ばか
り残りて、かりの匂とどまらざるが如し。されば「桃李は一旦の榮華
なり。松樹は千年の貞木なり。」といへり。いみじくありて身の能なき
が一人あるを見るだに能あるを思ひ出づる習なり。況や能に並ぶ
折のけぢめをや。いかにいはむや、同じ様なるが、一人は能ありて一
人は能なきをや。中にも、世の中の變り行くさま、昔よりは次第に衰
へもて行くにつけつつ、道道の才藝も亦父祖には及び難き習なれば、藍
よりも青からむ事は誠に稀なりといへども、形の如くなりとも
箕裘の業をつがざらむ、口惜しかりぬべし。

藍よりも云云
青取之於藍而
青於藍(荀子)
箕裘の業

〔増鏡〕

一序

きさらぎの中の五日は鶴の林に薪つきにし日なれば、かの如來
二傳の御かたみのむつまじさに、嵯峨の清涼寺にまうでて、常在靈
鷲山など、心のうちに唱へて拜み奉る。

傍に八十路にもや餘りぬらむと見ゆる尼ひとり、鳩の杖にかか
りてまゐれり。とばかりありて、「たやすく思ひ立ちつれど、いと腰いた
くて堪へがたし。今宵は、この局にうちやすみなむ。坊へ行きて、みあ
かしの事などいへ。」とて、具したる若き女房の、つきづきしき程なる
をばかへしぬめり。「釋迦牟尼佛」とたびたび申して、夕日の花やかに
さし入りたるを打見やりて、「あはれにも、山の端近く傾きぬめる日
かげかな。わが身の上の心地こそすれ。」とて、寄りゐたるけしき、何と
めり

ありつる人
伽

やむごとなし
古代に

元弘ノ亂
トニ段

なくなまめかしく、心あらむかしと見ゆれば、近くよりて「いづくよりまうで給へるぞ。ありつる人のかへりこむほど、御伽せむはいかが。」などいへば、「このわたり近く侍れど、年のつもりにや、いとはるけき心地し侍る、あはれになむ。」といふ。「さても、いくつにかなり給ふらむ。」と問へば、「いさ。よくも我ながら思ひ給へわかれぬ程になむ。百とせにもこよなく餘り侍りぬらむ。來し方ゆく先、ためしもありがたかりし世のさわぎにも、この御寺ばかりは、つつがなくおはします。なほやむごとなき如來の御光なりかし。」などいふも、古代にみやびかなり。

年の程など聞くも、めづらしき心地して、かかる人こそ昔物語もすなれと思ひ出でられて、まめやかに語らひつつ、「昔の事の聞かまほしきままに、年のつもりたらむ人もがなと思ひ給ふるに、嬉しきわざかな。少しのたまはせよ。おのづから、古き歌など、書きたるもの

すけむ
こら
おぼほる
あへなむ
つくも髪
ちてあつかひぐ
すかす
ひがごき

の片はし見るだに、その世にあへる心地するぞかし。」といへば、すげみたる口うちほほゑみて、「いかでか聞えむ。若かりし世に見聞き侍りしことは、ここらの年頃に、ぬば玉の、夢ばかりだになく、おぼほれて、何のわきまへか侍らむ。」とは言ひながら、けしうはあらず、あへなむと思へる氣色なれば、愈、言ひはやして、「かの雲林院の菩提講に参りあへりし翁の言の葉をこそ、假字の日本紀にはすめれ。又かの世繼がうまごとかいひし、つくも髪の物語も、人のもてあつかひざになれるは、御ありさまのやうなる人にこそ侍りけめ。なほのたまへ。」などすかせば、さは心うべかめれど、いよいよ口すげみがちにて、「そのかみは、げに人の齡もたかく、氣もつよかりければ、それに隨ひて、たましひもあきらかにてや、しか聞えつくしけむ。あさましき身は、徒なる年のみ積れるばかりにて、昨日今日といふばかりの事をだに、目も耳もおぼろになりにて侍れば、まして、いと怪しき僻ごと

あららか

世繼学華物語
草子すくさつた草子

なめり

どもにこそは侍らめ。そもそもやうに御覽じ集めけるふる事どもはいかにぞ。といふ。いさ、只おろおろ見及びしものどもは、水鏡といふにや、神武天皇の御代よりいとあららかにして。その次には大鏡、文徳の古より後一條の御門まで侍りしにや。又、世繼とか四十帖のさうしにぞ、延喜より堀川の先帝までは、すこしこまやかなる。又、なにがしのおとどの書き給へると聞き侍りし今鏡には、後一條より高倉院までありしなめり。まことや、いや世繼は、隆信朝臣の後鳥羽院の御位の後程までを記したりとぞ見え侍りし。その後のことなむ、いとおぼつかなくなりにける。おぼえ給へらむ所までものたまへ。今宵、誰も御伽せむ。かかる人に會ひ奉れるも、然るべき御契あらむものぞ。など語らへば、「そのかみの事は、いみじうたどたどしけれど、誠に事のつづきを聞えざらむも、おぼつかかるべければ、たえだえに少しなむ。ひがごとども多からむかし。そはさしなほし

かたはらいたし

傳記序
かたはらいたし

給へ。いとかたはらいたきわざにぞ侍るべきかな。かの古き事どもには、なぞらへ給ふまじうなむ。とて、
おろかなる心や見えむ、増鏡、

古きすがたにたちは及ばず。

とわななかし出でたるも憎からず、いとこだいなり。さらば今のたまはむ事をも亦書きしるして、かのむかしの面影にひとしからむとこそは思すめれ。といらへて、

今もまた昔を書けば、増鏡、

ふりぬる代代の跡にかさねむ。

二 鎌倉三代

武きもののふのおこりを尋ねれば、古の田村利仁などいひけむ將軍どもの事は耳遠ければさしおきぬ。そのかみより今まで源平

もののふ
田村
坂上田村麿。
利仁
藤原利仁。

おほやけの御守

の二ながれぞ、時により折にしたがひて、おほやけの御守とはなりにける。

桓武天皇と聞えし御門をば、柏原帝とも申しけり。その御子に、式部卿の御子と聞えしより五代の末に、平將軍貞盛といふ人、維衡・維時とて二人の子をもたりけり。間近く榮えし西八條の清盛のおどは、かの太郎維衡より六代の末なりき。その一門亡びしかば、この頃は僅にあるかなきかにぞさまよふめる。さて、かの維時が名残は、ひたすらに民となりて、平四郎時政といふ者のみぞ、伊豆國北條とかやにあめる。それも維時には六代の末なるべし。

又源氏武者といふも、清和御門あるは宇多院などの御後どもなり。二條院の御時、平治の亂に、伊豆國蛭が島へ流されし兵衛佐賴朝は、清和御門より八代の流に、六條判官爲義といひし者のうまごなり。左馬頭義朝が三郎になむありける。

うまご

あめる

忠盛・清盛

正衡・正盛

維衡・維時

高望王・高見王

葛原親王

式部卿

わかつ海
權を施す
なかなか
院の上
後白河天皇
二のはし
いへば更なり
よろこび
そうつるぶくし
總追捕使。

西八條の入道おとど、やうやう榮華衰へむとして、後白河院をなやまし奉りしかば、安からずおぼされて、かの賴朝を召出でて、軍を起し給ひしに、然るべき時やいたりにけむ。平家の人人は、壽永の秋の木枯に散りはてて、遂にわかつ海の底の藻屑と沈みにし後、賴朝いよいよ權を施して、更に君の御後見仕うまつる。相模國鎌倉の里といふ所に居りながら、世をたなごころの中に思ひき。皆人知り給へる事なれば、今更に申すもなかなかれど、院の上位につかせ給ひし初より、世のかためとなりて、文治元年卯月、二のはしをのぼりしも、屋島の内のおとど宗盛をいけどりの賞と聞ゆ。建久の初つ方、都にのぼる。その勢のいかめしき事、いへば更なり。その年の霜月九日、權大納言になされて、右近大將をかねたり。師走の朔日ごろ、よろこび申して、同じき四日、やがてつかさを還し奉る。この時ぞ、諸國のそうつるぶくしといふことうけたまはりて、地頭職にわが家のつ

はものどもをなし集めける。この日本國の衰ふる始はこれよりなるべし。

さて、あづまにかへり下るころ、上下いろいろのぬさおばかりしなかに、年ごろも祈りなどしたまひにし吉水僧正のたまひつかはしける。

あづまぢのかたになこそその關の名は、

君をみやこに住めとなりけり。

御かへし、賴朝、

みやこには君にあふさかちかければ、

なこそその關はとほきとをしれ。

かくて、新院の御位の初つ方、正治元年正月、あづまにて頭おろして、同じき十三日に年五十三にてかくれにけり。

新院
土御門天皇。

治承四年より天の下にもちひられて、二十年ばかりやすぎぬらむ。北の方は、先にきこえつる北條四郎時政の女なり。その腹に、をの子ふたりあり。太郎をば賴家といふ。弟をば實朝と聞ゆ。大將かくれてのち、兄はやがて立ちつぎて、建仁元年六月二十二日從二位、同じき日、將軍の宣旨をたまはる。又の年、左衛門督になさる。かかれども、少しおちるぬ心ばへなどありて、やうやう、つはものども、背き背きにぞなりにける。

時政は遠江守といひて、故大將の在りし時より、わたくしのうしろ見なりしを、まいて、今は孫の世なれば、愈、身重く、勢そふこと限なくて、うけばりたる様なり。子二人あり。太郎は宗時といふ。次郎は義時といひけり。次郎は心もたやすく、魂まされる者なるが、左衛門督をばふさはしからず思ひて、弟の實朝の君に附従ひて、思ひ構ふる事などもありけり。かうは、日にそへて人にもそむけられ行くに、いみじき病をさへして、建仁三年なが月中の六日、年二十二にて頭おろ

かう

まいて
(まして)
うけばり

又の年
おちるぬ心ばへ

あたらし
（をし）
うけ引く
（ひき）
のなし。

つくろふ
（いてゆ）
たばかる
（たばか）
す。世の中殘多く、何事もあたらしかるべき程なれば、さこそ口をし
かりけめ。幼き子の一萬といふにぞ世をば譲りけれど、うけ引くも
のなし。

入道は、かの病つくろはむとて、鎌倉より伊豆國へ、いでゆあびに
越えたりける程に、かしこの修善寺といふ所にて、つひにうたれぬ。
一萬もやがてうしなはれけり。これは、實朝と義時と、ひとつ心にて
たばかりけるなるべし。

さて、今はひとへに、實朝故大將の跡をうけつぎて、官位滯る事な
く、よろづ心の儘なり。建保元年二月二十七日正二位にせられしは、
閑院の内裏造れる賞とぞきこえ侍りし。同じき六年、權大納言にな
りて左大將をかねたり。左馬頭さへぞつけられける。その年、やがて
内大臣になりても、なほ大將もとのまゝなり。父にもやや立ちまさ
りていみじかりき。

このおとどは、おほかた心ばへうるはしく、猛くもやさしくも、よ
ろづ目やすければ、ことわりにも過ぎて武士の靡き從ふさま、父に
もこえたり。いかなる時にかありけむ。

山はさけ海はあせなむ世なりとも、
君にふたごころ、わがあらめやも。

とぞよみける。

時政は建保三年にかくれにしかば、義時ぞ跡をつぎける。故左衛
門督の子にて公暁といふ大徳あり。親のうたれにしことを、いかで
やすき心あらむ。いかならむ時にかとのみ思ひわたるに、この内大
臣、又右大臣にあがりて、大饗などめづらしく東にておこなふ。京よ
り尊者をはじめ、上達部殿上人、おほくとぶらひいましけり。さて鎌
倉にうつし奉れる八幡の御社に神拜に詣づる、いといかめしきひ
びきなれば、國國の武士は更にもいはず、都の人人もこせうしけり。

かづく
ごよみ
そこら
母北のかた
三位どの
尼將軍平政子の
敬稱。

たち騒ぎののしり、もの見る人もおかかる中に、かの大徳うちまぎ
れて、女のまねをして白きうす衣ひきかづき、おとどの車よりおる
程を、さしのぞくやうにぞ見えける。あやまたず、くびを打落しぬ。
その程のどよみ、いみじさ、思ひやりぬべし。かくいふは承久元年正
月二十七日なり。そちらつどひあつまれるものども、ただあされた
るほかなし。京にもきこしめしおどろく。世の中、火をけちたるさま
なり。こせうに、西園寺の宰相中將實氏もくだり給ひき。さらぬ人人
も泣く泣く袖をしづりてぞのぼりける。いまだ子もなければ、たち
つぐべき人もなし。事しづまりなむ程とて、故おとどの母北のかた
二位どのといふ人、ふたりの子をも失ひて、涙ほすまもなく、しをれ
すぐすをぞ將軍にもちひける。

三 承久のみだれ

承久も三年になりぬ。卯月二十日、御門おりさせ給ふ。春宮四つに
ならせ給ふに譲り申させ給ふ。近ごろ皆この御齡にて受禪ありつ
れば、これもめでたき御行末ならむかし。同じき二十三日、院號のさ
だめありて、今おりさせ給へるを新院と聞ゆれば、御兄の院をば中
院と申し、父御門をば本院とぞ聞えさする。

さても、院のおぼし構ふる事、忍ぶとすれど、やうやう漏れ聞えて、
東ざまにもその心づかひ用意すべかめり。あづまの代官にて伊賀の判
官光季といふものあり。かつがつかれを御かうじのよし仰せらる
れば、御方に参るつはものどもおし寄せたるに遁るべきやうもな
くて、腹切りてけり。まづいとめでたしとぞ院は思召しける。

あづまにも、いみじうあわて騒ぐ。さるべくて身の失すべき時に
こそあなれと思ふものから、討手の攻來りなむ時には、はかなきさま
にて屍を曝さじ。おほやけと聞ゆとも、自らし給ふことならねば、か

御門順徳院。
春宮懷成親王。即ち
仲恭天皇。受禪
後鳥羽院。

かつがつ
かうじ

後のたし

かたみに

またの日

つは我が身の宿世をも見るばかりと思ひなりて、弟の時房と、泰時といふ一男と二人をかしらとして、雲霞のつはものをたなびかせて都にのぼす。泰時を前にすゑていふやう、「おのれを、この度、都にまであらする事は、思ふ所おほし。本意の如く清き死にをすべし。人にうしろを見えなむには、親の顔また見るべからず。今をかぎりと思へ。賤しけれども、義時、君のために後めたき心やはある。されば横ざまの死にをせむ事はあるべからず。心を猛く思へ。おのれうち勝つものならば、再びこの足柄・箱根山は越ゆべし。」など、泣く泣くいひ聞かす。まことにしかなり。また親の顔拜まむ事もいとあやふしと思ひて、泰時も鎧の袖をしづる。かたみに今やかぎりとあはれに心細げなり。

かくてうちにでぬるまたの日、思ひかけぬほどに、泰時只一人、鞭を上げて馳來たり。父脇うちさわぎて、いかにと問ふに「軍のあるべ

おきて
きやう、大方のおきてなどをば、仰の如くその心を得侍りぬ。若し道のほとりにも、計らざるに、辱く鳳輦をさきだてて御旗をあげられ、臨幸の嚴重なることも侍らむに參りあへらば、その時の進退いかが侍るべからむ。この一ことを尋ね申さむとて、一人馳せ侍りき」といふ。義時とばかりうち案じて、「かしこくも問へるをのこかな。その事なり。まさに君の御輿に向ひて弓を引くことは、いかがあらむ。さばかりの時は、兜をぬぎ弓の弦をきりて、偏にかしこまりを申して、身をまかせ奉るべし。さはあらで、君は都におはしましながら、軍兵をたまはせば、命をしてて、千人が一人になるまでも戦ふべし。」といひもはてぬに、急ぎ立ちにけり。

都にも思しまうけつる事なれば、武士ども召しつどへ、宇治勢多の橋もひかせて、かたきを防ぐべき用意心ことなり。公經の大將一人のみなむ、御うまごのこともさる事にて、北の方一條中納言能保

御うまごのこと
義朝
能保
公經
道家
頼經

故大將
源頼朝

といふ人の女なり。その母北の方は、故大將のはらからなれば、一方ならずあづまを重く思して、さしいらへもせず、院の御心の軽き事とあぶながり給ふ。七條院の御ゆかりの殿ばら、坊門大納言忠信・尾張中將清經・中御門大納言宗家、又、修明門院の御はらから甲斐の宰相中將範茂など、つぎつぎあまた聞ゆれど、さのみは記しがたし。軍にまじりたつ人人、此の外の上達部にもあまたありき。

中院はあかで位をすべり給ひしより、言に出でてこそものし給はねど、世のいと心やましきままに、かやうの御騒にもことにまじらひ給はざめり。新院は同じ御心にて、よろづ軍の事などもおきて仰せられたり。

いつの年よりも五月雨はれ間なくて、富士川・天龍などえもいはず漲りさわぎて、いかなる龍馬も打渡しがたければ、攻めのぼる武士どもあやしくなやめり。かれども、遂に都に近づくよし聞ゆ
響きののしる

高瀬

れば、君の御武士もいでたつ。その勢六萬餘騎とかや、宇治・勢多へ分ち遣はす。世の中響きののしるさま、言の葉も及ばず、まねびがたし。あるは深き山へ逃げこもり、遠き世界におちくだり、すべて安げなく騒ぎみちたり。いかがあらむと、君も御心亂れておぼし惑ふ。かねては猛く見えし人々も、まことの際になりぬれば、いと心あわただしく色を失ひたるさまども、頼もしげなし。水無月十日あまりにや、いくばくの戦だになくて、遂にみかたの軍破れぬ。荒磯に高潮などのさしくるやうにて、泰時と時房と亂れ入りぬれば、いはむ方なくあきれて、上下ただ物にぞあたり惑ふ。

あづまよりいひおこするままに、かの二人の大將軍はからひおきてつつ、保元の例にや、院の上都の外に遷し奉るべしと聞ゆれば、女院・宮宮所におぼしまどふ事さらなり。本院は隱岐の國におはしますべければ、まづ鳥羽殿へ、網代車のあやしげなるにて、文月六

心やまし

さらなり
本院
後鳥羽院

ものにもがなや
さりかへすもの
にもがなや・世
の中をありしな
がらのわが身と
思はむ。(源氏物語河海抄引歌)

日入らせ給ふ。今日をかぎりの御ありき、あさましうあはれなり。ものにもがなや。と思さるるもかひなし。その日やがて御ぐしおろす。御年四十に一つ二つや餘らせ給ふらむ。まだいとほしかるべき御程なり。信實朝臣召して、御姿寫し書かせらる。七條院へ奉らせ給はむとなり。かくて同じき十三日に御船にたてまつりて、遙なる浪路を凌ぎおはします御心地、この世の同じ御身ともおぼされず。いみじう、いかなりける代代の報にかと恨めし。

新院も佐渡の國に遷らせ給ふ。まことや、文月七日、御門をおろし奉りき。この卯月かとよ、御讓位とてめでたかりしに、夢のやうなり。さて上達部・殿上人、それより下はた殘るなく、この事にふれにしたぐひは、重く軽く罪に當るさまいみじげなり。

中院は、初よりしろしめさぬ事なれば、東にも咎め申さねど、父の院遙に遷らせ給ひぬるに、長閑にて都にあらむ事、いとおそれあり

新院
順徳院
御門
仲恭天皇

中院
御門院

わりなし

うき世にはかかれとてこそ生れけめ。

ことわり知らぬ我が涙かな。

と思されて、御心もて、その年閏神無月十日、土佐の國の幡多といふ所に渡らせ給ひぬ。道すがら雪かきくらし、風ふき荒れ、吹雪して、來しかた行くさきも見えず、いと堪へがたきに、御袖もいたく凍りてわりなき事多かるに、

うき世にはかかれとてこそ生れけめ。

うたて

父の王を失ふ云

云
劫初以來有諸
顯王貪國位
故殺其父一
萬八千人。
(觀
無量壽經)

きさみ

むけの民

故院
後白河院。

おほけなし

あやなし

ともなるべききざみの少しおたがひめに世にへだたりてその恨の末などより事起るなりけり。今のやうにむげの民と争ひて、君のほろび給へるためし、この國にはいとあまたも聞えざめり。されば承平の將門、天慶の純友、康和の義親、いづれも皆猛かりけれど、宣旨には勝たざりき。保元に、崇徳院の世をみだり給ひしだに、故院の御位にてうち勝ち給ひしかば、天照る御神も、みもすそ川のおなじ流と申しながら、猶、時の御門をまもり給はする事は強きなめりとぞ古き人人も聞えし。又信賴の衛門督おほけなく二條の院をおびやかし奉りしも、遂に空しき屍をぞ道のほとりに捨てられける。かれれば、ふりにし事を思ふにも、なほさりともいかでか。上皇今上あまたおはします王城の、いたづらに亡ぶる様やはあらむと、頼もしくこそおぼえしに、かくいとあやなきわざの出で來ぬるは、この世ひとつのことにもあらざらめども、迷のおろかなるまへには、猶いとあ

四 新島守り

やしかし。

津の國のこやの
云々
津の國のこやさ
も人をいふべき
に・ひまもそな
けれ葦の八重蓑
(後拾遺集、和泉
式部)
藐姑射の山
藐姑射之山有
仙人居焉。肌膚
如冰雪、綽約若
處士。(莊子)

六つにて位に即き給ひて、十三年おはしましき。おり給ひて後も、土佐院十二年、佐渡院十一年、なほ天の下は同じ事なりしかば、すべて三十六年が程、この國のあるじとして萬機のまつり事を御心一つに治め、百のつかさをしたがへ給へりしその程、吹く風の草木を靡かすよりも勝れる御ありさまにて、遠きをあはれび、近きをなで給ふ御めぐみ、雨のあしよりもしげければ、津の國のこやのひまなき政事をきこしめすにも、難波の葦の亂れざらむ事をおぼしき。藐姑射の山の峯の松も、やうやう枝をつらねて、千代に八千代をかさね、霞の洞の御住ひ、いく春を経ても、空ゆく月日のかぎり知らずのどけくおはしましぬべかりける世を、ありありてよしなき一ふし

に今はかく花の都をさへたち別れ、おのがちりぢりにさすらへ、磯の苦屋に軒をならべて、おのづからこととふものとては、浦に釣するあま小舟、鹽焼く煙のなびく方をも、我がふる里のしるべにかかり、ながめ過させたまふ御住ひどもは、それまでと月日を限りましたらむだに、明日しらぬ世のうしろめたさに、いと心細かるべし。まうしろめたさ

かたそふ
こころぐ
柴のいほりの云々<sup>いづくにもすま
れすはただすま
であらむ柴の
庵のしばしなる
世に。(新古今
西行法師)
集</sup>

見やらるる海の眺望、二千里の外ものこりなき心地する、今更めきたり。鹽風のいとこちたく吹きくるを聞しめして、

我こそは新島もりよ、おきの海の
あらき浪かぜこころして吹け。
同じ世にまたすみのえの月や見む、

今日こそよそにおきの島もり。

年もかへりぬ。所所浦浦あはれるなる事をのみおぼしなげく。佐渡院あけくれ御行をのみし給ひつつ、猶さりともとおぼさる。隱岐には浦よりをちの遙遙と霞みわたれる空をながめ入りて、過ぎにし方かきつくしおもほしいづるに行方なき御涙のみぞとどまらぬ。

うらやまし、長き日影の春にあひて、
汐くむあまも袖やほすらむ。

夏になりて、萱葺の軒端に五月雨の霏いと所せきも、御覽じなれ

所せし

ぬ御心地に、さまかはりて珍しく思さる。

あやめふくかやが軒端に風すぎて、

しどろに落つるむらさめの露。

初秋風のたちて、世の中いとどもの悲しく露けさまさるにいはむ方なくおぼしみだる。

故郷を別れ路に生ふる葛の葉の、

秋はくれどもかへる世もなし。

たとしへなくながめしをれさせ給へる夕暮に、沖の方にいと小さき木の葉の浮べると見えて漕ぎくるを、あまの釣舟かと御覽する程に、都よりの御消息なりけり。墨染の御衣、夜の御衾など、都の夜寒に思ひやり聞えさせ給ひて、七條院よりまゐれる御文、ひきあけさせ給ふより、いといみじく御智もせきあぐる心地すれば、ややためらひて見給ふに、「あさましくも、かくて月日経にける事、今日明日

とも知らぬ命のうちに、今一たび、いかで見奉りてしがな。かくながらは、死出の山路も越えやるべうも侍らでなむ」など、いと多くみだれ書き給へるを、御顔に押しあてて、

垂乳根の消えやらで待つ露の身を、

風よりさきにいかでとはまし。

八百萬かみもあはれめ、たらちねの

われ待ちえむとたえぬ玉の緒。

初雁のつばさにつけつつ、ここかしこより、哀なる御消息のみ、常は奉るを御覽するにつけても、あさましういみじき御涙のもよはしなり。

五 むら時雨

笠置殿には、大和・河内・伊賀・伊勢などより兵ども参りつどふ中に、

兵衛

すくよか
したたむ
行幸をなしきこ
ゆ

きほふ
むねむねし
かこつ方なし

肝を消す
(肝をつぶす)
あぢきなし

事のはじめより頼み思されたりし楠木兵衛正成といふものあり。心猛く、すぐよかなるものにて、河内國におのが館のあたりをいかめしくしたためて、このおはします所若し危からむをりは、行幸をもなしきこえむなど用意しけり。東の夷ども、やうやう攻上る由きこゆ。もとより京にある武士ども、われ先にときほひ参る。木丸殿には、さこそいへ、むねむねしきものもなし。いかになりゆくべきにかと、いと物心細く思しみだる。わが御心もての御事なれば、かこつ方なけれど、故郷の空もあはれに思しいでらる。秋も深くなりゆくままに、山の木の葉のうちしぎれ、谷の嵐のおとづるも、かたきのきほふかと肝を消す御すまひ、いつしか御身をかへたる心地し給ふもあぢきなし。

うかりける身を秋風にさそはれて、

思はぬ山のもみぢをぞ見る。

たなびかす
おほしさわぐ
(思し亂る)
葛折

いかがせむにて。
はかなげ
そなたさま
しおぶ
たてまつる
ならはぬ

既にあづまの武士ども、雲霞の勢をたなびかし上るよし聞ゆれば、笠置にもいみじうおぼしさわぐ。もとよりいとけはしき山の葛折を、えもいはず木戸・逆茂木・石弓などいふ事どもしたためらる。さりともたやすくは破れじと頼ませ給へるに、後の山より御かたきどもくづれ参りて、木戸ども焼きはらひ、おはしますあたり近く、既に煙もかかりければ、今はいかがせむにて、あやしき御姿にやつれて辿り出でさせ給ふ。座主の法親王御手をひき奉り給へるも、いとはかなげなる御ありさなり。中務の御子・大塔の宮などは、かねてなたざまにやと思し心ざして、藤房・具行兩中納言、師賢の大納言入道、手をとりかはして、焰の中を免れいづる程の心地ども、夢とだに思ひもわかつ、いとあさまし。少しのびさせ給ひてぞ、御馬尋ね出でて、君ばかりたてまつりぬれど、ならはぬ山路に御心地もそこなは

御心地をためら
ふ
案内聞ゆ
思ひやる

のたまはす
(のたまふ)

ひかされ
(ひかれ)
なめなり

捕
(さらはる)

れて、誠に危く見えさせ給へば、たかまの山といふわたりに、しばし御心地をためらふ所に、山城の國の民にて、深須五郎入道とかいふもの参りかかりて、案内聞えたるしも、いとめざましう口をし。上達部思ひやるかたなくて、只目を見かはして、いかさまにせむとあきれたるに、東より上れる大將軍にて陸奥國の守貞直といふもの、大勢にて参れり。今はただ、ともかくものたまはすべきやうなければ、遂にかひなくて、かたきのために御身をまかせぬるさまなり。

やがて宇治に行幸あるべきよし奏すれば、御心にもあらでひかされおはします程に、心うしといふものめなり。具行藤房忠顯少將など、やがておのが手のものどもに隨へさせつ。大納言入道、御馬のしりに走りおくれて、ここかしこの岩蔭木のもとに休みつつ、とかくためらふ程に、それも見つけられて、捕られぬ。君をば宇治へ入れ奉りて、まづ事のよし六波羅へ聞ゆる程に、一二日御逗留あり。か

奉
御覽じやらる
あへなし

くいふは長月三十日なれば、空のけしきさへ時雨がちに、涙もよほし顔なり。平等院の紅葉御覽じやらるるも、かからぬ行幸ならばとあへなし。後冷泉院かとよ、ここに行幸し給ひて、三四日おはしましける、その世の人の心地、上下何事かはとうらやましくあはれにおぼさる。

すさまじ
衛府のすけの
心地して
網代輿
あやし
(いやし)
檜皮屋
兩院
春宮
光嚴院
しつらひ
かたじけなし
御覽じふる
はしたなし

神無月三日、都へ入らせ給ふも、思ひしにかはりて、いとすさまじげなる武士ども、衛府のすけの心地して御輿近くうち圍みたり。鳳輦にはあらぬ網代輿のあやしきにぞたてまつれる。六波羅の北なる檜皮屋にはもとより兩院・春宮おはしませば、南の板屋のいとあやしきに、御しつらひなどしておはしまさするも、いとほしうかたじけなし。間近きほどによろづ聞しめし御覽じふることごとにつけても、いかでか御心動かぬやうはあらむ。口をしうおぼしみだる。ならはぬ御宿りに、時雨の音さへはしたなくて、

まだなれぬいたやの軒のむら時雨、

音をきくにもぬるる袖かな。

中務の宮は正成がもとにおはしましつれど、御門のかくならせ給ひぬれば、今はかひなして、それも都へ入らせ給ひて、佐佐木判官時信といふものの家にわたり給ひぬ。つれづれと物思しみだるるより外の事なし。

世のうさをそらにもしるや、神無月、

ことわりすぎてふる時雨かな。

ひとつ御腹の座主の法親王も、長井の高廣とかやいふ者預りたてまつりぬ。御門遠く遷らせ給はむほど、この御子達もおのがちりぢりになり給ふべしなど聞えけり。

春宮は世をつつしみて、六波羅に渡らせ給ふ。御門はあたのために同じ御やどり、葦垣ばかりを隔にておはしませば、主なき院の内

いとさびしくて、衛士のたく火も影だに見えず。内にはいつしかけしかるものなど棲みつきて、或時は紅の袴長やかにふみたれて、火ともしたる女、見るままに丈は軒とひとしくなりて、後にはかきけち失するもあり。又いみじう光を放ちて、髪を前に亂しかけたる童なども見えけり。鬼殿などはかくやありけむとおそろし。人すまで年へ荒れぬる所などにこそ、かかる事もおのづからありけれ。僅か一月・二月の中にかかるべきにはあらぬを、これかれいと怪しきわざなるべし。

六 隠岐より

かの島には、春來ても猶浦風さえて浪あらく、渚の水もとけがたき世のけしきに、いとどおぼしむすばる事つきせず、かすかに心細き御すまひに、年さへ隔たりぬるよと、あさましく思さる候ふ人

世のけしき

いみじ
くんづ大殿ごもら
こうじ給ふさめざらましを
思ひつねは
や人の見えづら
はさめざらまし
む・夢さしりせ
を。(小野小町)
しほち

人も、しばしこそあれ、いみじくくんじたり。今年は元弘三年なり。閏二月あり。後のきさらぎの初つ方より、とりわきて密教の祕法を試みさせ給へば夜も大殿ごもらぬ日かず経て、さすがにいたうこうじ給ひにけり。心ならずまどろませ給へる曉方夢うつつともわかれほどに後宇多院ありしながらの御面影さやかに見えて、聞えしらせ給ふこと多かり。打驚きて夢なりけりとおぼす程、いはむ方なく名残かなし。御涙もせきあへず、「さめざらまし」とおぼすもかひなし。源氏の大將須磨の浦にて父御門見奉りけむ夢の心地し給ふもいとあはれにたのもしう、いよいよ御心づよさまさりて、かのしほちが御むかへのやうなる釣舟もたよりいで來なむやと待たるる心地し給ふに大塔の宮よりもあま人のたよりにつけて聞え給ふ事絶えず。

都にも猶世の中しづまりかねたる様に聞ゆれば、よろづにおぼ

し慰めて、關守の打寝るひまをのみうかがひ給ふに、然るべき時到れるにや、御垣守に候ふつはものども、御氣色をほの心えて、靡きつかうまつらむと思ふ心つきにければ、さるべきかぎり語らひ合せて、同じ月の二十四日の曙に、いみじくたばかりてかくろへゐて奉る。いとあやしげなるあまの釣舟の様に見せて、夜深き空の暗きまぎれにおし出す。折しも霧いみじう降りて、行先も見えず、いかさまならむとあやふけれど、御心をしづめて念じ給ふに、思ふ方の風さへ吹きすさみて、その日の申の時に出雲の國に著かせ給ひぬ。ここにてぞ人人心地しづめける。

同じ二十五日、伯耆國稻津浦といふ所へ移らせ給へり。この國に名和又太郎長年といひて、むねむねしきものあり。彼が許へ宣旨を遣はし給ひたるに、いとかたじけなしと思ひて、とりあへず五百餘騎の勢にて御迎にまわれり。又の日、賀茂の社といふ所を立入らせ

むねむねし

御垣守

かくろへるて
奉る。
夜深き空

給ふ。都の御社思し出でられていとたのもし。それより船上寺といふ所へおはしまして、九重の宮になづらふ。これよりぞ國國のつはものどもに御敵を亡すべきよしの宣旨つかはしける。比叡の山へものばせられけり。

かくて隱岐には、出でさせ給ひにし畫つ方より騒ぎあひて、隱岐の前の守追ひて参るよし聞ゆれば、いとむくつけくおぼされつれど、ここにもその心して、いみじう戦ひければ、引返しにけり。京にも東にも、驚き騒ぐさま思ひやるべし。正成が城のかこみに、そこらの武士ども、かしこにつどひをるに、かかる事さへそひにたれば、いよいよ東よりも上りつどふめり。

七 都のさわぎ

彌生にもなりぬ。十日あまりのほど、俄に世の中にみじうののしる。何ぞと聞けば、「播磨の國より、赤松なにがし入道圓心とかやいふもの、御門の敕に従ひて攻めくるなり」とて、都の中あわて惑ふ。例の六波羅へ兩院も御幸とて、上下たち騒ぐ。馬車走りちがひ、武士どものうちこみののしりたるさまいと恐し。

卯月十日あまり、又あづまより武士多くのぼる中に、をと年笠置へむかひたりし治部大輔源高氏のぼれり。院にもたのもしく聞しめして、かの伯耆の船上へ向ふべきよし、院宣たまはせけり。東を立ちし時も、うしろめたく二心あるまじきよし、おろかならず、ちかごとぶみを書きてけれども、底の心やいかがあらむ、とかく聞ゆるすぢもありけり。この高氏は古の賴義朝臣の名残なりければ、もとのねざしはやむごとなき武士なれど、承久よりこのかた、頭さしいだす源氏もなくて埋れ過しながら、類ひろく、勢四方にみちて、國國に心よせのもの多かれ巴、かやうに國の危きをりをえて、思ひ立つ道

さざめく

もやあらむなど、したにさざめくもしく、伯耆國へ向ふべしといひなして、まづ西山・大原わたりに一とまりして、臯月七日ほのぼのと明くる程より、大宮の木戸どもをおし開きて、二條より下、七條の大路を東ざまに、七手に分れて旗をさしつづけて、六波羅をさして雲霞の如くたなびき入るに、更におもてをむかふるものなし。この治部大輔は、やうより御門の敕を承りてければ、さかさまに都を亡さむとするなりけり。鬨つくるとかやいふ聲は、雷の落ちかかるやうに地の底もひびき、梵天の宮の中も聞き驚き給ふらむと思ふばかり、とよみあひたるさま來し方ゆく先くれて、物覺ゆる人もなし。武士ども、なかばをわけて金剛山へ向ひたれば、さならぬのこり、都にあるかぎりは戦をなす。今を限の軍なれば、手を盡してののしるほど、まねびやらむ方なし。雨の脚よりもしげく走りちがふ矢にあたりて、目のまへに死をうくるもの數を知らず。一日一夜、いりもみ

ミヨミアフ

とよみあかすに、兩六波羅にも、殘る手なく防ぎつれど、遂に陣の内破られて、今はかくと見えたる。日頃さぶらひ籠り給へる上達部殿上人なども、今日と思ひ設けたらむだに、君のおはしまさむかぎりは、いかでかまかでも散らむ。まして、かねてよりかく構へけるをも知ろしめさで、昨日かとよ、院宣を賜はりしものの、かく裏返りぬれば、誰か思ひよらむ。すべて上下となく、ひとつにたち込みて、あわて惑ひたり。日ぐらし、八幡・山崎・竹田・宇治・勢多・深草・法性寺など、燃えあがる煙ども、四方の空にみちみちて、日の光も見えず、墨をすりたるやうにて暮れぬ。ここにも火かかりて、いとあさましければ、いみじう固めたりつる後の陣を辛うじて破りて、それより免れて出でさせ給ふ御心地ども、夢路を辿るやうなり。兩院もいとあやしき御姿に、ことさら窶したてまつる。いとまがまがし。上達部・大臣たち、榜のそばとりて、冠などの落ちゆくも知らず、空あゆむ心地して、あるは

あやし
まがまがし

河原を西へ東へ、さまざまちりぢりになり給ふ。兩六波羅、東をさして、あづまへと心がけて落ちければ、御幸もおなじさまになし奉りけり。

なにがしの宮
兵部卿守良親王。
五辻宮と稱す。
龜山天皇の皇子。

さて御幸は近江國におはしますほどに、伊吹といふほとりにて、なにがしの宮とかや、法師にていましけるが、御門の御心よせにて、かやうの方もほの心え侍りけるにや、待ちうけて矢を放ち給ふ。また京よりも追手かかるなど聞えければ、六波羅の北といひし仲時、兩院具し奉り、番馬といふ所の山のうちに入れ奉りぬ。手のものどもも、なほ残りて隨ひつきけれども、戦もかなはずやありけむ。遂にこの山にて腹切りにけり。おなじき南、時益といひしは、これまでも参らず、守山の邊にてうせにけりとぞ聞えし。あやなくいみじき事のさまなり。

あやなし

〔神皇正統記〕

一 正 道

凡そ天地の間、ありとある人不正にしては立つべからず。殊更にこの國は神國なれば、神道にたがひては、一日も月日を戴くまじきいはれなり。倭姫命人に教へ給ひけるは、「黒き心なくして、丹き心をもちて、清く潔く齋み慎め。左の物を右に移さず、右の物を左に移さずして、左を左とし、右を右とし、左にかへり、右にめぐることも、萬事たがふことなくして、大神に仕うまつれ。元を元とし、本を本とする故なり。」となむ。誠に君に仕へ、神に仕へ、國を治め、人を教へむことも、かかるべしとぞ覺ゆる。少しの事も、心にゆるす所あれば、大いにあやまる本となる。周易に、「霜を履みて、堅氷に至る。」といふことを、孔子釋してのたまはく、「積善の家に餘慶あり、積不善の家には餘殃あり。

霜を履みて云々
〔履霜堅氷至。〕
易經

積善の家に云々^一
 「積善之家必有^二
 餘慶^三積不善之^四
 家必有^五餘殃^六。」
 (易經)

道は須臾^一云々^二
 「道也者、不可^三
 須臾離^四也。可^五
 離非^六道也。」
 (中庸)

君を殺し父を殺すことも、一朝一夕の故にあらず。といへり。毫釐も君をゆるかせにする心を萌すものは、必ず亂臣となる。芥蒂も親をおろそかにする形あるものは、果して賊子となる。この故に古の聖人「道は須臾も離るべからず。離るべきは道にあらず。」と説けり。但し、その末を學びて源を明めざれば、事にのぞみて覺えざる誤あり。その源といふは、心に一物を蓄へざるをいふ。しかも、虛無の中にとどまるべからず。天地あり、君臣あり。善惡の報影響の如し。おのれが欲を立て、人を利するを先として、境境に對すること、鏡の物を照すが如く、明明として迷はざらむを誠の正道といふべきにや。代降れりとて、みづから卑しむべからず。天地のはじめは、今日をはじめとする理あり。しかのみならず、君も臣も神をさること遠からず。常に冥の知見をかへりみ、神の本誓を覺りて、正に居せむことを心ざし、邪なからむことを思ふべし。

二 聖 代

凡そ君たるものは、いづれの宗をも、大槻しろしめして捨てられざらむことぞ、國家攘災の御謀なるべき。一宗に志ある人、餘宗を謗りいやしむ、大きな誤なり。人の根機品品なれば、教法も無盡なり。況やわが信する宗をだに明めずして、いまだ知らざる教を謗らむは、極めたる罪業にや。われはこの宗に歸すれども、人はまた彼の宗に志す。共に隨分の益あるべし。國の主となり、輔政の人ともなりなば、諸教を捨てず、機を洩さずして、得益の廣からむことを思ひ給ふべきなり。且は、佛教に限らず、儒・道の二教、乃至もろもろの道、貧しき藝までも起し用ふるを聖人といふべきなり。

男夫は稼穡を勉めて、おのれも食し、人にも與へて飢ゑざらしめ、女子は紡績を事として、みづからも衣、人をも暖ならしむ。賤しきに

住宦

似たれども、人倫の大本なり。天の時に隨ひ、地の利によれり。この外、商估の利を通ずるもあり、工巧の技わざを好むもあり、仕宦に心ざすもあり。これを四民といふ。仕宦するにとりて文武の二道あり。坐して以て道を論ずるは文士の道なり。この道に明ならば相とするに堪へたり。征きて功を立つるは武人の業なり。この業に譽あらば將とするに足れり。されば、文武の二つは、しばらくも捨て給ふべからず。世亂れたる時は、武を右にし、文を左にす。國治まれる時は、文を右にし、武を左にす。ともいへり。かくの如く、さまざまなる道を用ひて、民の愁をやすめ、各の争なからしめむことを本とすべし。民の賦歛を厚くして、みづからの心をほしきままにするとは、亂世亂國の基なり。わが國は、國種のかはることはなけれども、政亂れねれば、曆數も久しうからず、繼體もたがふためしなり。いはむや人の臣としてその職を守るべきにおきてをや。

賦歛

三 泰時論

本所の煩

こごなる

泰時は心正しく政すなほにして、人をはぐくみ、物におごらず、公家の御事を重くし、本所の煩をとどめしかば、風の前に塵なくして、天の下すなはち靜まりき。かくて年代を重ねしこと、ひとへに泰時が力とぞ申し傳ふめる。陪臣として久しく權を執ることは、和漢兩朝に先例なし。その主たりし賴朝すら、二世をば過ぎず。義時いかなる果報にか、圖らざる家業を始めて兵馬の權を執れりき。ためし稀なることにや。されど、ことなる才徳は聞えず。又、大名の下に矜る心やありけむ。中二とせばかりありて身まかりしかど、かの泰時相續して、徳政を先として、法式を固くし、己が分を計るのみならず、親族並にあらゆる武士までも戒めて、高官高位を望む者なかりき。その政、次第のままに衰へ、つひに滅びぬるは天命の終る姿なり。七代ま

で保てるこそ彼が餘薰なれば、恨むる所なしといひつべし。

凡そ、保元・平治よりこの方の濫りがはしきに、賴朝といふ人もなく、泰時といふものもからましかば、日本國の人民、いかがなりなまし。この謂をよく知らぬ人は、故もなく皇威の衰へ、武備の勝ちにけると思へるは誤なり。天つ日嗣は御讓にまかせ正統にかへらせ給ふにとりて、用意あるべきことの侍るなり。神は人を安くするを本誓とす。天下の萬民は、みな神物なり。君は尊くましませど、一人を樂しましめ、萬民を苦しむことは、天も許さず、神もさいはひせぬ謂なれば、政の可否に隨ひて、御運の通塞あるべしとぞ覺ゆる。

まして、人臣としては、君を尊び民を憐み、天にせぐくまり地にぬき足し、日月の照すを仰ぎても、心のきたなくして光にあたらざらむことを怖ぢ、雨露の施すを見ても、身のしからずして惠に洩れむことを顧みるべし。朝夕に、長田・狭田の稻の種を食ふも皇恩なり。晝

長田

さいはひす

通塞

榮井

國柄を執る仁に
あたる

夜、生井・榮井の水の流を呑むも神徳なり。これを思ひも入れず、あるにまかせて欲を恣にし、私を先として公を忘るる心あるならば、世に久しき理あらじ。況や國柄を執る仁にあたり、兵權を預る人として、正路を踏まざらむにおきては、いかでか其の運を全くすべき。泰時が昔を思ふには、よく誠ある所ありけむかし。子孫はさほどの心あらじなれど、固くしける法のままに行ひければ、及ばずながら世をも重ねしにこそ。

異朝の事は、亂逆にして紀なきためし多ければ、例とするに足らず。わが國は神明の誓いちじるしくして、上下の分さだまれり。しかも善惡の報あきらかに、因果のことわり空しからず。かつは遠からぬ事どもなれば、近代の得失を見て、將來の鑒識とせらるべきなり。

四 人臣の道

あはれぶ
きほふ

前車の轍

凡そ王土に生れて、忠を致し、身を捨つるは人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。然れども、後の人を勵まし、その跡をあはれびて賞せらるるは、君の御政なり。下として、きほひ争ひ申すべきにはあらぬにや。まして、させる功もなくして過分の望をいたすこと、みづから危むるはしなれど、前車の轍をみるとことは、まことにあり難き習なりけむかし。

中古までも、人のさのみ豪強なるをばいましめられき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を亡ぼし、家を失ふためしあれば、誠めらるるも理なり。鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬することを止むべしといふ制符、度度ありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は宣旨をたまはりて諸國の兵をめしぐしけるに、近代となりては、やがてかたはるるやから多くなりしによりて、この制符は下されき。果して今までの亂世の基なれり。

かけあふ

このころよりの諺には、一度軍にかけあひ、或は家子・郎従・節に死ぬるたぐひもあれば、わが功におきては日本國を賜へ、もしさは半國を賜はりても足るべからずなど申すめり。まことにさまで思ふ事はあらじなれど、やがてこれより亂るるはしともなり、又朝威のかろがろしさも推量らるるものなり。言語は君子の樞機なりといへり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕ることはあるべからぬことにつき。さきに記し侍りし如く、堅き氷は霜を履むより至る習なれば、亂臣賊子といふものは、そのはじめ心言葉をつつしまざるより出でくるなり。世の中の衰ふると申すは、月日の光のかはるにもあらず、草木の色の改まるにもあらず、人の心の悪しくなりゆくを末世とはいへるにや。

あからさま

あらじなれど

〔駿臺雜話〕

一 自序

大城
深山木の云々
深山木のその梢
とも見えざりし、
櫻は花にあらは
れにけり。(源頼
政)

横相
言は對ひ禮を
厚くす。禮を
至るを

更僕
時向か太立永、事

武藏の國、大城の東、駿臺のもとに、草の庵むすびて住みける一人の翁ありけり。そのかみ、北國より爰に來て家居せしが、もとより深山木の花にあらはるべき材もなければ、その梢と知る人もなくして、ただ學の窗に文をひろげ、見ぬ世の人を友とし、老の到るをも忘れつつ、昨日といひ今日と暮して、はや二十とせあまりに及べり。近き頃より、衰病日に加はり、それに瘡痏の疾ありて、起居も心に協はねば、日夜、衾枕をのみ親しみ、書籍にさへ疎くなりたり。何をか世にある思ひ出にせまし。ここに此の翁に就いて物學ぶ輩ありて、書を講じ文を論じ、おののおの虛にして往き、實にして歸らぬはなし。その外、花の晨月の夕には、必ず訪ひきて、何くれと世にあらゆる事ど

良辰
清談
良辰
清談

有識のきは

雞肋

も語りつづけつつ、日をくらし、僕を更ふれども、やむ事なし。昔より、良辰は失ひ易く嘉會は得がたければ、いつも賓主ともに唐錦たたまく惜しくなむ見えし。翁も客に對して清談するを好みて、身の煩しさも心地よく覺ゆるままに、古今の世にいひぬる難波の事のよしあしとなく、本末にかけて其の理を盡しけるが、我ながらをかしと思ふ一ふしもあれば、その席はてて、わが子弟に命じて、文字に寫し置きけるに、日數を経ておぼえず卷をなせり。もとより有識のきは人の目を留むべきものにもあらねば、さして惜しむべきとはあらねども、古人の雞肋といへるにも類しぬべし。さすが反故となしてかいやり捨てむも本意なれば、さて兒輩に與へて讀ましめむとて、しばらく殘しおきけらし。

二 年にはづかし

一 自序 二 年にはづかし

齋發

朔風齋發として日夜に冽しく、寒氣もいやましなりしかば講會もしばらくやみて、後日を期せむといふ程こそあれ、今年も覺えずはや暮れにけり。例の人人、翁が起居を問はむとて來りしに、翁むかひて「この頃は年の暮とて、世上はさぞ忙しくこそ候はめ然るに市朝に住みながら、翁が草堂ほど靜なることは侍らじ。蕭然たる環堵の中に、いつとなう病に臥して日を送り侍れば、月の過ぎ年暮るるをも覺え侍らず。されど、歲月の逝くは惜しむに足らず、唯悲しむべきは、年來學びしかひもなく、空しく不徳にて身老い年積りて、このまま朽ちはてむこそ、今更悔いてもあまりあることにて候へ」と

て、

なにをして身のいたづらに老いぬらむ。

年のおもはむこともはづかし。

なにをして云々
何をして身のいたづらに老いぬらむ、
年之思はむ事ぞやさしき。
(古今集俳諧歌)

に富み、材力に足る。もし懈らずして日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。然れども、歲月は恃むに足らず、材力は多とするに足らず、唯孳孳汲汲として勉めて息まざるにありぬべし。もし悠悠として日を涉り、一旦年老い齡傾きて後日頃の懈を思ひ出でて、いかに悔ゆとも何の益かあるべき。即ち今の翁が身の上にて候。

されば古詩にも、「少壯不努力、老大徒傷悲。」といひ、陶淵明も「盛年不重來、一日難再晨、及時當勉勵、歲月不待人。」といへば、古人もこの感懷を同じうすとぞ見えし。これらの詩句、時時吟詠して勇進の志を振ひ起すべし。又世に傳ふる朱文公の勸學の文に、

勿謂今日不學而有來日。勿謂今年不學而有來年。日月逝矣歲不我延矣。嗚呼老矣是誰之愆。

この文、本集に見えず。朱子家訓不自棄の文などの類にて、朱子の少作か、又は後人の擬作にて、名を朱子に託するにてもあらむか。よし

二 年にはづかし

高詩
文選に作家の知
れざるものない
へり。この句は
二十七長歌行に
出づ。

陶淵明
晉の人、名は潛、
世に靖節先生と
號す。陶侃の曾
孫なり。

朱文公
宋の大儒、朱文
公はその謡。

陶侃
晉の名臣、孝感
帝以下四朝に仕
へて功勞多し。
死して大司馬を
贈らる。

襄祖

優游涵泳

誰の作にもせよ、言簡にして意も明白なり。折節うちずんじて、自ら警むるによかるべし。それよりも翁が常に愛するは、陶侃が語なり。「大禹聖人乃惜寸陰、至於衆人當惜分陰」豈可佚遊荒廢。生無益於時、死無聞於後「是自棄也。」といへることぞ、學者志を立つるの法とすべけれ。前にいふ淵明が詩も、襄祖以來の家法にこそと思ひ侍れ。凡そ人生れて、學に志ありといふ際の、生きて時に益なく、死して後に聞ゆることなく、草木と同じく朽ちはつるは、いと口をしかるべきことなり。されば諸君も、この陶侃が語をもて自ら激昂して、日夜勤勉せらるべし。但し學は勇進をよろこぶと雖も、又急迫なるを嫌ひ侍る。とかく一生ここを離れぬ事にて候へば、急迫にして求むべきにあらず、唯懈惰を戒めて、常に聖賢の書に優游涵泳せられば、久しうして自ら進益あるべし。

翁、昔加賀に在りし時、士族の中に紹鷗・利休が風流を慕ひて茶の

逆旅

湯を好むものあり。江戸へ行役の時、道中茶具を持して、逆旅にても、釜をかけ炭をおきて樂としけるを、同行の人見て、「いかにすければとて、道中にはやめよかし。」といへば、その人いふは、「道中の日とて一生の外にあらばこそ、これも一生の日數の内なれば、わが茶の湯をする日にあらずといふ事なし。家にあると何ぞ異ならむ。」とて、その後もやめざりき。學者の道に志すも、この人の茶の湯を好むが如くなるべし。もとより道は須臾も離るべからざれば、一生の間、道を行ふ日にあらざるはなく、あふさかるさ、道のある所にあらざるはなし。然るを急迫にしてもとめば、たとひ僅僅にして得ることありとも、皮膚の間にてやみなむ。いかでかその戯を噛んで滋味に飫くことあるべき。況や急迫なれば久しきに堪へぬものぞかし。未だ日至の時に及ばずして、やがて倦怠するに至りなむ。翁おもへらく、學問は勉勵を要とす、ただ急にして迫切なるをおそる。義理は涵泳なる

道は須臾も云々
道也者不可離
夷離也可離
非道也。(中庸)
あふさかるさ

日至の時

を貴ぶ、緩にして懈弛なるを戒む。迫切ならず、懈弛ならず、學者進修の道において、緩急相得て背かざるに近かるべし。

三 朝顏の花一時

松永某とて鈴木氏が道學の友ありけり。その人、朝顏の歌とて語りしが、自ら詠める歌にや、又鈴木氏が詠めるにや、とかく兩人の中にてあるべし。

あさがほの花一時も、千とせ經る

松にかはらぬこころともがな。

この歌も意味深きやうにおぼえ侍る。昔より朝顏を詠める歌おほけれども、大かた朝顏のあたなる事をいひて、秋のあはれを添へ、世のはかなきを知らするを趣向とする外は見えず。白居易が「松樹千年終^ニ是朽^ツ、槿花一日自爲榮^{ラス}」といふ詩を、公任の朗詠にも採りて風

澎瘞

瞿曇が涎
莊周が臍

朝に道を聞きて
云々
子曰、朝聞^ト道、
夕死可矣。
論語

雅とすれども、これも強ひて榮枯を一つにし、彭瘞を齊しうする意にて、俗耳には高きやうに聞ゆれども、いと淺き事になむありける。此等は瞿曇が涎を引き、莊周が臍をなむるに過ぐべからず。今、松永氏が松にかはらぬ心といへるは、それにてはなかるべし。各如何思ひ給へる。翁は朝に道を聞きて夕に死するも可なりといへる意とこそ思ひ侍れ。朝に咲いて日影を待ちて消ゆるは、朝顏の天より受けたる性なり。世には千歳を経る松さへあるに、これ程はかなき生を得て、己を忘れ、外を羨む心いささかもなく、朝な夕ないと快く、見事に咲きて、受け得たる性分をつくして枯るること、花の見する誠なれ。いかであなたには見るべき。それは松も同じ事なれど、朝顏のはかなきにて、一入そのことわりしく見え侍る。されば松の心に千歳なく、朝顏の心に一日なし。唯各己が性分を盡すばかりなり。然るを、松の千歳を榮と見るも、朝顏の一日をはかなしと見るも、た

子を思ふ書に發揮する。

六

頓悟

だ見る人の慾目なり。松と朝顔との心に何かあらむ。

凡そ無情の物は斯くの如し。人は有情なる故に萬物の靈とはいへど、却て私智に妨げられて、未だ道を聞かざる時は此處に到るを得ず。されば人は道を聞くべきなり。然れども道を聞くとは、佛者の頓悟などのやうに心得べからず。道はもとより事物當然の理なり。匹夫・匹婦も共に知り共に行ふところなり。ただ眞に知らねば、實に行はず。それ故に習ひて察せず、行ひて著しからず、身を終ふるまで之によれども、遂に悟入する事なし。今、道を聞くといふは外の事にあらず、ただ此の道理を眞に知り實に行うて、魚の水に安んじ鳥の林を楽しむ如く、常に道理を命として、暫くも離るる事なかるべきなり。生きてある限は道に従ひ、死すれば身も道もそれまでにて永く安かるべし。一日生きては一日の道を盡し、一月生きては一月の道を盡し、一年生きては一年の道を盡して死す。かかれば假令朝に

絲毫

修短

短

道を聞いて其の夕に死すとも、絲毫の遺念なし。ここをもて慮るに、朝顔も一日の壽といへど、己が受け得しままに殘なく十分に咲きて、さて日影を待ち得て消ゆれば、何の恨かあるべき。松の千歳と修短は大いにかはれども、いづれも天命をつくして自ら飫きたる事は同じかるべし。これを松にかはらぬ心とはいへるなり。松永氏も此の心にならまほしきまゝに、朝顔によそへて斯くは詠みけるならし。翁もその歌にならひて、

天地にうけしまことをそのままに

咲きてはしほむ朝顔のはな。

そこなはずむさばらぬぞ朝顔の

松にかはらぬこころとは知る。

まことに世話にいふ兎脣の嘯も心なぐさみにぞ侍る。益々こそをかしくおぼすらめ。ただ辭をしてて意を探り給へかし。

本の初
自分のことを卑下してす。
志派を事
お

四 王子試筆の詞

白駒の隙過ぎ易

し 黃金の術

犬馬の齡

董生

自己をす分をも

れて他

藍豆中

ニヒタ、是れい

タ、

二ヒタ、是れい

タ、

三ヒタ、是れい

タ、

四ヒタ、是れい

タ、

五ヒタ、是れい

タ、

六ヒタ、是れい

タ、

七ヒタ、是れい

タ、

八ヒタ、是れい

タ、

九ヒタ、是れい

タ、

十ヒタ、是れい

タ、

十一ヒタ、是れい

タ、

十二ヒタ、是れい

タ、

十三ヒタ、是れい

タ、

十四ヒタ、是れい

タ、

十五ヒタ、是れい

タ、

十六ヒタ、是れい

タ、

十七ヒタ、是れい

タ、

十八ヒタ、是れい

タ、

十九ヒタ、是れい

タ、

日月迭に移りて白駒の隙過ぎ易く、衰病日に犯して黄金の術成り難し。されば犬馬の齡これ迄あるべしとも思はざりしが、何時しか老の波より来て、今年七十あまり五つの春にもなりぬ。剩へ近き頃より身に瘡疾を得て、手足もあがらず、起居もなやめのまことに、昔の董生を學ぶとにはあらねども、この三とせ、春の園を窺ふ事もかなはねば、閨の中ながら、梢を傳ふ鶯の音に殘の夢をさまし、枕にかかる梅が香に過ぎし昔を忍ぶばかりになむありける。しかはあれど、幸に若かりし時より學の窗に年を経る甲斐ありて、程朱の道に従ひて鄒魯の風を尋ね、韓歐が文を好みて、邯鄲の歩を學ぶにぞ、老の寢覺も慰みぬべし。さて多く年の年月を経て、世の移り變る有様を考ふるに、盛衰榮枯互に行きかふをば、夢とやいはむ、現とやいはむ。誠に富貴は浮べる雲の如く、禍福はあざなへる繩の如しといへるに、何か違ふ事あるべき。中にただ、わが聖人の建て給へる三綱・五常の道のみ、天地と並び傳へ、古今のへだてなく、こればかりは變る事あるべからず。人として仰ぎ崇ぶべきはこの道ぞかし。然れども、儒教世に行はれざりしより、人人義理にうとく、利欲にさとくなる程に、五常の道すたれて、風俗日に下りゆくこそなげかしけれ。

もとよりいやしき身にて、一代の風教を維持せむとすとも、我が力及ぶべきにあらねば、ひとへに蚍蜉の樹を撼かし、精衛が海を填むるに似たるべし。さはいへど、世を憂へ民を新にするも、わが儒、分内の事なれば、之を度外に置くべきにもあらず。世に老師・宿儒と稱する人の好んで異説をほしいままにし、又は他道を雜へて、仁義・五常の沙汰をばよそにするこそうけられね。ただ務めて新奇を競うて俗耳を悦ばしめ、時好に投げるなるべし。いと口惜しき事なり。古人の所謂阿世曲學とは是等をいふなるべし。よし人はさもあらば

あれよし風俗は昔にあらずなりぬとも、わが身一つはもとの如く仁義の道を守り、たゞ前修の模範を失はじと思ふこそ、責めて儒となりししるしともいふべけれ。

新玉の春の初とて、人は皆己が身の福を萬代と祝ふ中に、我はただ五常の道に心をよせて、何時も變らずめでたきものはこの道なりとて、かくなむ筆を試むるならし。

この春もかはらで行かむ七十に

あまる五つの道をたづねて。

この筆記は、去年辛亥のとし春より冬に至るまで、諸生と語りし雑話を書き集むとて、今年壬子の春より筆を起して、秋に至りて稿を脱しつ。もとよりいやしき蟹の藻屑ながら、若し朽ちずして吾が黨に永く傳はりなば、後學の身を省みる萬一の助にもならむかし。

よりて今年試毫の言葉を末に附して、終りて復始まり、無窮に及ぶの意を示しけるとぞ。

享保壬子の年冬十月鳩巣しるす。

〔玉かつま〕

言の葉のすずろにたまる玉がつま、
つみてこころを野べのすさびに。

一 わすれ草

からぶみの中に、とみにたづぬべき事のありて、思ひめぐらすに
その書とばかりはほのかにおぼえながら、いづれの巻のあたりと
いふこと更におぼえねば、ただ心あてに、ここかしこたづねれど、
え見いです。さりとて、いとあまたある巻巻を、初よりたづねもてゆ
かむには、いみじくいとまいりぬければ、さもえ物せず、つひに空
しくてやみぬるが、いと口惜しきままに思ひづづける。
ふみ見つる跡もなつ野の忘れ草、

老いてはいとどしげり添ひつつ。

もとより、物おぼゆること、いとともしかりけるを、この近き年ごろ
となりては、いとど何事も、ただ今見聞きつるをだに、やがて忘れが
ちなるは、いといといふかひなきわざになむ。

二 花の雪

やよひのころ、あるところにて、櫻の花の木のもとに散りしける
を見て、一とせ吉野にものせし時も、おほくはかやうにてこそ散り
ぬるほどなりしかと、ふと思ひいでられけるままに、

ふみ分けし昔戀しき、み吉野の

山つくらばや花の白雪。

三 めづらしき書

めづらしき書を得たらむには、親しきも疎きも同じ志ならむ人には、かたみに易く貸して、見せもし寫させもして、世に廣くせまほしきわざなるを、人には見せず、おのれ一人見て誇らむとするは、いといと心ぎたなく、物まなぶ人のあるまじきことなり。

ただし、得がたき書を、遠くたよりあしき國などへ貸し遣りたるにあるは道のほどにてはふれうせ、あるは其の人にはかに亡くなりなどもして、遂にその書かへらずなる事あるは、いと心うきわざなり。されば遠き境より借りたらむ書は、道のほどのことをもよくしたため、又人の命は俄なることも圖り難きものにしあれば、ながらむ後にもはふらさず、確に返すべく捷て置くべきわざなり。

すべて、人の書を借りたらむには、速かに見て返すべきわざなるを、久しくとどめ置くは心なし。さるは書のみにもあらず、人に借りたる物は何も何も同じ事なる中に、いかなればにか、書は殊に用な

くなりて後も、なほざりに打棄ておきて、久しく返さぬ人の、よに多きものぞかし。

四 新なる説を出すこと

とりまかなひ

なべて

するぶんに

近き世、學問の道ひらけて、大かた萬のとりまかなひ、さとくかしこくなりぬるから、とりどりに新なる説を出す人おほく、その説よろしければ世にもてはやさるるによりて、なべての學者いまだよくもとのはぬ程より、われおとらじと、よにことなるめづらしき説を出して、人の耳をおどろかすこと、今之世のならひなり。その中にはずゐぶんによろしき事も稀には出でくけれど、大方いまだし

き學者の心はやりて言ひいづる事は、ただ人にまさらむ勝たむの心にて、かろがろしく、まへしりへをもよくも考へ合さず、思ひよれるままに打ちいづる故に、多くはなかなかないみじき僻事のみ

なかなか

かへさひ思ふ

なり。すべて新なる説を出すはいと大事なり。いくたびもかへさひ思ひて、よく確なるよりどころをとらへ、いづくまでもゆきとほりて、たがふところなく動くまじきにあらずば、たやすくは出すまじきわざなり。その時にはうけばりてよしと思ふも、程へて後に今一たびよく思へば、なほわろかりけりと、われながらだに思ひならる事の多きぞかし。

五 世の常にことなる新しき説

おほかた、世の常にことなる新しき説をおこす時には、よきあしきをいはず、まづ一わたりは、世の中の學者に憎まれそしらるるものなり。あるはおのがもとよりより來つる説と、いたく異なるを聞きては、よきあしきを味ひ考ふるまでもなく、初よりひたぶるにてて、とりあげざる者もあり。あるは心のうちには、げにと思ふふし

ものから
ねたし
うけぬ顔
いひけつ
おしけつ
いかにぞや
きてある

多くあるものから、さすがに近き人のことに従はむ事のねたくて、よしともあしともいはで、ただうけぬ顔して過すたぐひもあり。あるはねたむ心のすすめるは、心にはよしと思ひながら、その中の疵をあながちに求め出でて、すべてをいひけたむとかまふる者もあり。大方ふるき説をば、十が中七つ八つはあしきをも、あしき所をばおほひかくして、わづかに二つ三つのとるべき所のあるを取立てて、力のかぎりたすけ用ひむとし、新しきは、十に八つ九つよしとも、一つ二つのわろき事をいひたてて、八つ九つのよき事をもおしけちて、力のかぎりは、我も用ひず、人にも用ひさせじとする、こは大方の學者のならひなり。されども、又稀稀には、新なる説のよきを聞きては、古きがあしき事をさとりて、速かに改め從ふたぐひもなきにはあらず。ふるきをいかにぞや思ひて、かくはあらじかとまでは思ひよれども、みづから定むる力なくて、疑はしながら、さてあるな

どは、新なるよき説をききては、かくてこそはと、いみじくよろこび
 つつ、たちまちに従ふたぐひもありかし。大かた新なる説は、いかに
 よしとも速かには用ふる人まれなるものなれど、よきは年をへて
 も、おのづから、つひには世の人のしたがふものにて、あまねく用ひ
 らるれば、その時にいたりては、初にねたみそしりし輩も、心には悔
 しく思へど、おくればせに従はむも、猶ねたく人わろくおぼえて、心
 よからずながら、ふるきをまもりてやむともがらも多かり。しか世
 の中の論さだまりて、皆人の従ふ世になりては、初よりすみやかに
 改めしたがひつる人は、かしこく心さとく思はれ、ふるきにかかる
 らひて、とかくとどこほれる人は、心おそくいふかひなく思はるる
 わざぞかし。

六 道にかなはぬ世の中のしわざ

道にかなはずとて、世に久しくありならひつる事を、にはかにや
 めむとするはわろし。ただそのそこなひのすぢを省き去りて、ある
 物はあるにてさしおきて、まことの道をたづぬべきなり。よろづの
 事をしひて道のままに直し行はむとするは、なかなかにまことの
 道のところにかなはずることあり。萬の事は興るも滅ぶるも盛り
 なるも衰ふるも、みな神の御心にしあれば、さらに人の力もて、えう
 ごかすべきわざにはあらず。まことの道の意を悟りえたらむ人は、
 おのづから此のことわりは、よく明らめ知るべきなり。

七 富貴をねがはぬ儒者

世世の儒者、身の貧しく賤しきをうれへず、富み榮えをねがはず、
 よろこばざるをよき事にすれども、そは人のまことの情にあらず。
 おほくは名をむさぼる例のいつはりなり。まれまれにさる心なら

なかなかに

人わろし

かかづらふ

かし

ひがもの
あながちに
いそしく
なりのほる

む者ありとも、そは世のひがものにこそあれ。何のよき事ならむ。こ
とわりならぬふるまひをして、あながちにねがはむこそは悪しか
らめ。ほどほどにつとむべきわざをいそしきうとめて、なりのぼり、
富みさかえむこそ、父母にも先祖にも孝行ならめ。身のおとろへ家
まづしからむは、上なき不孝にこそありけれ。ただおのがいさぎよ
き名をむさぼるあまりに、まことの孝を忘るるも、亦もろこし人の
常なりかし。

八 世の物知り人

一むき
あげつらふ

世の物知り人の、ひとのときごとのあしきをとがめず、一むきに
かたよらず、これをもかれをもすてぬさまにあげつらひをなすは、
多くはおのが思ひとりたる趣をまげて、世の人の心にあまねくか
なへむとするものにて、まことにあらず、心ぎたなし。たとひ世の人

は、いかにそしるとも、わが思ふすぢをまげて従ふべき事にはあら
ず。人のほめそしりにはかかるまじきわざぞ。大方、一むきにかた
よりて、あだしときごとをばわろしとがむるをば、心せばくよか
らぬ事とし、一むきにはかたよらず、あだしときごとをもわろしと
はいはぬを、心ひろくおいらかにてよしとするは、なべての人の心
なめれど、必ずそれさしもよき事にもあらず。よるところ定まりて、
そを深く信ずる心ならば、必ず一むきにこそよるべけれ。それにた
がへるすぢをばとるべきにあらず。よしとしてよる所に異なるは、
みなあしきなり。これよければ、かれは必ずあしきことわりぞかし。
然るを、これもし、又かれもあしからずといふは、よる所さだまら
ず、信すべき所を深く信ぜざるものなり。よる所さだまりて、そを信
ずる心の深ければ、それに異なるすぢのあしき事をば、おのづから
とがめざる事あたはず。これ信ずる所を信するまめごころなり。人
まめごころ

はいかに思ふらむ、我は一むきにかたよりて、あだしときごとをば
わろしと咎むるも、必ずわろしとは思はずなむ。

九 兼好法師が詞のあげつらひ

兼好法師が徒然草に、「花はさかりに月は隈なきをのみ見るもの
かは。」とか言へるは、如何にぞや。古の歌どもに、花はさかりなる、月は
隈なきを見たるよりも、花のもとには風をかこち、月の夜は雲をい
とひ、あるは待ち惜しむ心づくしを詠めるぞおほくて、こころ深き
も殊にさる歌に多かるは、皆花は盛りをのどかに見まほしく、月は
隈なからむことを思ふ情のせちなるからにこそ、さもえあらぬを
歎きたるなれ。いづこの歌にかは、花に風を待ち、月に雲をねがひた
るはあらむ。さるを、かの法師が言へる如くなるは、人の情に逆ひた
る、さかしら心のつくり風流にして、まことのみやびごころにはあ

らずかの法師がいへることども、この類おほし。

すべて、なべての人のねがふ心に違へるを、みやびとするは、つく
りことぞ多かりける。人の心は、嬉しきことはさしも深くは覺えぬ
ものにて、ただ心にかなはぬことぞ深く身にしみては覺ゆるわざ
なれば、すべて嬉しきを詠める歌には、心深きはすくなくて、心にか
なはぬすぢを悲しみ憂へたるにあはれるは多きぞかし。さりと
て、わびしく悲しきを、みやびたりとてねがはむは、人の眞の情なら
めや。

又、同じ法師の「人はよそぢに足らで死なむこそ、めやすかるべけ
れ。」といへるなどは、中ごろよりこなたの人の、多く歌にも詠み、常に
も言ふすぢにて、命ながらむことを願ふをば心ぎたなきことと
し、早く死ぬるを目安きことにいひ、この世をいとひ捨つるをいさ
ぎよきこととするは、これみな、佛の道にへつらへるにて、多くはい

よそぢ
めやすし

つはりなり。詞にこそさもいへ、心のうちには誰かはさは思はむ。たとひ心心には眞にしか思ふ人のあらむも、もとよりの眞心にはあらず、佛の教に惑へるなり。人の眞心は、いかにわびしき身も、早く死なばやとは思はず、命をしまぬものはなし。されば、萬葉などの頃までの歌には、ただ長く生きたらむことをこそ願ひたれ。中頃よりこ

わびし
うらうへ
なたの歌とは、その情うらうへなり。

三つ國
すべて何事も、なべての世の人の眞心にさかひて、異なるをよきことにするは、とつ國のならひのうつれるにて、情をつくり飾れるものと知るべし。

一〇 物學ぶともがら

書の中にも、よにかたき事として誰も解きえぬふしをえり出でて

問ふならひなり。たとへば、書紀の齊明御卷なる童謡、萬葉にては一の卷なる莫囂圓隣云云と書ける歌などやうのたゞひなり。かうやうのかたき事を、まづ明めまほしく思ふも學者のなべての情なれども、然らば易き事どもは皆よく明め知れるかと試むれば、いとたやすき事どもをだに、いまだよくもえわきまへず。さるもの、さしこえて、まづ難き節を明めむとするは、いとあぢきなきわざなり。よく聞えたりと思ひて心もとどめぬことに、思の外なる僻心得の多かるものなれば、まづたやすき事をいくたびもかへさひかむがへ、問ひも明めて、よく得たらむ後にこそ、難きふしをば思ひかくべきわざなれ。

一一 わが弟子に諭す

われにしたがひて物まなぶともがらも、わが後によきかむがへ

なづむ
なづむ

かにかくに

の出できたらむには必ずわが説にななづみそ。わが惡しきゆゑを
いひてよきかむがへをひろめよ。すべておのが人ををしふるは道
を明かにせむとなれば、かにもかくにも、道を明かにせむぞ。われを
用ふるにはありける道を思はで徒にわれをたふとまむは、わが心
にあらざるぞかし。

一二 述懷

昨日は今日の昔にて、はかなくのみすぎにすぎゆく世の中を、つくづくと思へば、あはれわが世もいくほどぞや。指ををりてかぞふれば、はやみそぢにも餘りにけり。命長くて七八十いけらむにてだに、早くなかばはすぎぬるよと思へば、まだよごもれるやうなる身も、ゆくさきほどなき心地のして、心細くぞおぼゆる。かくのみはかなく、こころなき木・草・鳥・けだもののおなじつらになにすとしも

なく明し暮しつつ、いけるかぎりのよをつくして、いたづらに苔の下にくちはてなむは、いと口をしくいふかひなかるべきことと思ふにも、よろづにいたりすくなく、つたなき身にしあれば、何事をしいでてかは、よの人にもかずまへられ、ながらむ後の代にくちせぬ名をだにとどめましと、いとど人に似ぬおろかさへとりそへてぞ、かなしく心うかりける。さりとて、はた、身をえうなきものにはふらかしはつべきにしもあらず。かくのみ拙くおろかなる心ながら、何わざにまれ、おこたりなく、わざと心にいれてつとめたらむに、つひにはひとつゆゑづけて、なのめにしいづるふしもなどかはなからむと、あいなだのみにかかりてなむ。

一三 手書くこと

よろづよりも、手はよく書かまほしきわざなり。歌よみ、學問など

心おこり
する人は、ことに手悪しくては、心おとりのせらるるを、それ何かは苦しからむといふも、一わたりことわりはさることながら、なほあかずうちあはぬ心地ぞするや。

うちあはぬ
おもなく
かたは
おぼゆるを、人の請ふままに、おもなく短冊一ひらなどかき出でて見るにも、我ながらにいとかたはに見苦しう、がたくなるを、人にかに見るらむと、恥しく胸痛くて、若かりしほどになどて手ならひはせざりけむと、いみじうくやしくなむ。

一四 人の善惡

人のただ一言、ただ一行によりて、その人のすべての善き惡しきを定めいふは、いとあたらぬことなり。すべて、善き人とても、稀にはことわりにかなはぬしわざも混らざるにあらず、惡しき人といへども善きしわざも混るものにて、生ける限のしわざ、ことごとに善き惡しき一かたに定まれる人はをさをさなきものなるを、いかでかは、ただ一言一行によりて定むべき。

一五 つらつら椿

萬葉集の一の巻に「巨勢山乃列列椿都良都良爾見乍思奈許湍乃春野乎」といふ歌を思ひいでて、我も詠めるは、

世の中をつらつら椿つらつらに

思へばおもふ事ぞおほかる。

さるは、わが身の上のうれへにもあらず、なべての世のたたずまひ、人のありさまの、善き惡しきことにつけて、おふけなく思ふすぢの心にこめがたきは、をりをり此の巻にももらせるふしも多かれど、猶いひても言ひても盡きすべくもあらずなむ。

たたずまひ

おふけなく

をさをさ

つらつら椿

〔琴後集〕

一 隨時樓の記

うつせみの
(うつせみの)
つきづきし

埋火

ひみづ
春のあじろ云云
の詞
枕草紙に見ゆ。
すさまじ
(すさまじ)

すさまじ
(すさまじ)

所せし

うつせみのよの人のことわざよろづにさまざまなれど、時にそ
むき折にあはで、つきづきしからざらむは、いみじきふしなりとも、
いかで心のゆくわざなるべき。されば、夏の日は埋火のあたたかな
るを思はず、冬の夜にひみづの涼しさをば忘れつべし。古の人も、春
のあじろ、八月のしらがさねをこそ、すさまじきことの例には引き
いでたりけれ。かかれれば、はかなきすさまじも折にあひたるはをかし
く、見所なき草木も時を得たるはめづらかになむおぼゆる。しかは
あれど、人ぐさしげき巷の所せく門たち並びたらむあたりには、時
をすぐし、折を失ふたぐひ多くて、月にたよりよきは花のうとく、水
によしあるは山遙にて、四つの時のゆきめぐるに従ひて、心をやる

べき住居はいとも得がたしや。

ここに前田のぬしの高殿こそ、あやしく所得てはおぼゆれ。しり
へは市路につづくものから、前は世ばなれたるのぞみあり。春はむ
かつをの花のかわりを居ながら袂にしめ、夏はみなぎは清き池の
蓮葉を舟ならずして手折り、秋は月にうそぶき、冬は雪にうたふも、
すべて山水のあはれをそへざるをりなむあらざりける。ましてあ
るじの言の葉もて友にまじらふこと廣ければ、時にふれ折を過さ
もしらぬ高殿なればとて、聞中大徳のことさらに、時に隨ふてふ事
をもて名づけられたるは、ふかき心しらひにこそありけらし。

心しらひ

ものから
むかつを
みなぎは
(みぎは)
うそぶく
あく世もしらぬ

ものは
(ものには)

二 知足庵の記

あはれ、世のならはしこそはかなきものはあなれ。貴き賤しき品

おのがじし
心ゆく

林にやどる云々
鶴鳴葉深林不
過一枝偃鼠
飲河不満腹。
(莊子)

いとことなりといへども、おのがじし心ゆくばかりなるは稀にて。ただなはぬ事のみぞ多かりける。花を思ふとては梢のあらしをうらみ、月をめづるとては尾上の雲をいとふためし、誰かはのがるべき。林にやどるさぎきは、わづかなる小枝のかげをのみたのみ、ながれに水もとむるねずみは、ただ腹ふくらすに過ぎずとこそ古人もいひつれかかる理をだにわかたば、限あるこの世に限なき事を思ふべきかは。

けがし
(けがらはし)

ここに中村のぬしなむ、よく塵の世のけがしきをのがれて、萱の軒、松の樅に心の月をすましめ、花をつむゆふべ、闕伽をくむあかつき、御佛につかふるいとまる時は、氷をくだき雪を煮て、梅尾の昔をしのぶめる業にしも心をなぐさめける。これやこの世に求むべきすぢを忘れ、また人を羨むべきふしをも思はで、おのが心から事足るわざにしもあれば、かの古人のいひげむ理にこそかなはめ、い

あけつらふ
うべな

でや、うつそみの世の限なきもとめあるきはとは、日をならべてあげつらふべくもあらざりけり。うべなうべな、この住家をしも足ることを知るとは名づけしこと。

三 山里に花を見る

あかぬものから
散り散らず
ちりちらす聞か
まほしきを、故
郷の花見てかへ
る人も逢はなむ。
(拾遺集、伊勢)

鶯に身を云々
うぐひすに身を
あひかへば、散
るまでもわが物
にして花は見て
まし。(後撰集、
伊勢)

なかなかに

一夜の旅寝は猶あかぬものから、散り散らずとか待つらむ人もあめれば、けふは立歸らむとするを、花のたよりならでは、またかかる人目をも見じなどあるじは止めまほしげなれど、鶯に身をあひかへばとて、わかれにけり。

紫だちたる空のけはひ打曇りて、昨日は隈なく見渡されし梢どもも、霞の迷ひ覺束なく、なかなかに振捨てがたきあしたなり。ややおり来るままに、山ぎは明りゆきて、やうやうさしのぼる日影に見やれば、小柴垣萱が軒端はそこといちじるく、まして立竝ぶ梢の雲

そこはかごなく
はだれ

心づくし云々
ふめは惜し。ふ
までは行かむ万
もなし、心づく
しの山櫻かな。
(千載集、赤染衛
門)

打吹きて、そこはかとなく散り來なるが、見るがうちに道もはだれ
になりもてゆけば、あな心づくしの山櫻よとて、人人おりゐぬ。
谷水の流かすかに音づれ松の聲は遙に響きて、散りのこる尾上
の花は、猶わかれ惜しみがほに匂ひ、霞をもるる鳥の囀は、更に我を
とどむる心地のみして、うらうらと永き春の日も、今日はた晝間す
ぐるをだに知らざりけり。かくとも斧の柄はくたしつべくなむあ
るや。

斧の柄は云々
斧のえは木の本
にてやくちなま
し、春を限らぬ
櫻なりせば。(金
葉集、大中臣公
長)

四 八月十五夜の曇れる月

來てふ云々
月夜よし夜よし
と人に告げやら
は、来てふに似
たり、待たずし
もありせば。(古今
集、詠人不知)

まもる
わりなし
むは、いとど心もとなきを、更けゆかばかくのみにはあらじを、こよ
ひは寝で明してましなど言ひつつ、伊豫簾むなしうかかげて、空の
みうちまもらるるも、いとわりなしや。今宵は名に負ふ園生の花も
徒に夜の錦にて、淺茅がもとの松蟲のみ、やうやう聲そはりゆくも、
猶あかぬわざながら、さすがにあはれ添へつべし。

五 わざと法と

よろづ何のわざにも、古より法^のとなすしるべありて、それによら
ざらむは、まことの心得がたく、その法を得たるは、まめやかなり
とて人もうべなふめり。こはもとより理さることながら、深く事の
もとを考ふるによろづの事、はじめに法をまうけおきて、後にその
わざをなし出づるにはあらず。そのわざあるが上にこそ法てふ事
は出で來めれ。かかるれば、わざは本にて、法は末なり。かれ、何の業にも、
かれ
うべなふ

よく心を深めて、その道に入りたらむ人は、われより法をば始めつ
べし。すべて、下りたる世人の心癖にて、法になづみ、あとにかかづら
ひて、なかなかにあらぬ方に僻みもて行く類も多かるをや。もろこ
し人の詞に「法は法なきがうちにあり」といへるは、その詞味ありと
こそ覺ゆれ。さはいへど、これは世の常のなほなほしきはの人の
ためには、たやすくいひがたくやあらむ。

なづむ
かかづらふ
なかなかに

なほなほし

〔荒が花〕

一 治沼舍にて蓮を見る

大比叡うつされたる上野の岡の麓、比良の大わだなせる池水の
ほとりに、さざなみや志賀ざれ浪もて名をおぼせたる屋あり。白
妙の富士のみ雪も消え、あらがねの土さへさくといふなる頃、人皆
涼みせむとて其のやどりに集ひて、高きやに登りて見渡せば、池の
面は紅のゆはたと見ゆるぞ、蓮の花の咲きみちたるにてはありけ
る。おひたてる葉の廣ごりたるは、宮路ゆくうま人のきぬ笠の如く、
浮きたるは、大庭に百の司のわらうだ敷きなべたる如く、葉におけ
る露は白玉の五百つ集ひを解きみだしたるになむ似たりける。池
の水清らに澄みて、遊ぶいろくづ思ふ事なげなり。人人おばしまに
寄りゐる程、かの岡の木高かる瑞枝吹きこす風の涼しきに、えなら
いろくづ
おばしま

たごしへ
(たとへ)

ぬ香のかをりくるもたとへなしや。かなたの岸より中島まで、長き隄をつきて、石もて作れる橋かけわたせるは、もろこしの西湖とかいふめる處のさまかけるに似通ひて、あたりに行交ふ人の袖のにほひさへなつかしく見ゆ。主はわが國ぶりの歌作り、書見ることをしも好めるが上に、こと國の書をさへに、朝夕の友とせりければ、さる方の友垣にしも乏しからず。唐歌好める何がしの博士は、さにぬりの小舟に唐少女のせて、此の花折らせまく思ひ、日の入るくにのますらをの教に心をよするは、これぞこの上の品のうてなに生れ出でたらむ心地するなど言ひあへりけり。人人心心に歌によび出づれば、もだもあらず。

なべて世のにごりにそまで、住む人の

友と見るべき花ぞこの花。

かくて上野の岡の入相の鐘、木の間しのぎて響き渡れば、み盛りに開けたりし花の、また、ふふめるさまに立ちかへりたるも、あはれ深かるものから、遠方の梢の驚すらねぐらもとむるものをして、人人あかれかへりぬ。

二 山里の月

耳になり弭の音を聞かず、目に旗手のなびきをしも見ぬ御代に逢ひては、何事につけても憂しとわびしと怨みかこつべき事やはある。されば世を避くとしもあらねど、あきじこる市の中またに近き賑しさを厭ひて、この山里にはうつろひ住めるになむありける。「秋こそ殊に」といへるも宜なるかな。籬のもとに佇める小鹿、松に木づたふましらの聲も、ひとりある人を慰むるに似てあはれるなるに、茜さす日も入りはて、杣人の斧のひびき絶えて、端山のかひより月さしのぼれば、そがひの嶺より落つる瀧つ瀨は、こがねの色の絲ひ

秋こそ云々
山里は秋こそ
とにわびしけれ、
鹿のなく音に目
をさましつつ。
(古今集、玉生
忠岑)
かひ
そがひ

きはへたらむ如く、岩に碎くる水は白玉をこきちらすとぞ疑はる。
とこしへに清らかにして、物にとどこほる事なきをわが心とはせ
むと思ふに、たぐへてむものはなぞ。

〔泊酒文藻〕

一 砧を聞く

近しと聞けば遠し。遠しと聞けば近し。じきるもたゆみ、たゆむも
またしきる。雁がねの聲の砧をさそふにやあらむ。砧の音の雁がね
に通ふにやあらむ。あなあやし、あなあやし。そもこの音の悲しきか、
住む里のさびしきか、打つ折のうきゆゑか。皆あらず。聞く人の心の
わびしきなり。

二 筆の跡を見て亡き人を偲ぶ

この夏は例よりも照りはたたきて、いと堪へ難ければ、何くれと
なすべきわざもうちおきて、門守る犬のやうに喘ぎのみ暮しぬる
を、いつしか秋風のそよと耳驚かすに、徒にかくてのみやはとて、ひ

はたたく

ひぢ近

取つて

友垣

半は泉に歸す
往時渺茫都似レ
夢・舊遊零落半
歸泉。(和漢朗
穂村正路。
萩の屋のあるじ
わきて
ありのすさび

ぢ近なる厨子どもより始めて、塗籠の書ら、數のかぎりひき廣げて、日に曝し風入るるに、塵箱の底にこめられて紙魚といふ蟲のすみかとなりにし反古どものいと多かるを、かかる序に一つ二つ取うでつつ開き見るに、早くより睦びかはしたる友垣の言の葉どもの中を、およびを折りて其の人彼の人と數ふれば、「半は泉に歸す。」とうちうめかるる中には、此の頃まで花にとひ月に向ひし萩の屋のあらじのなむ、わきて數多く見出でたる。昨日まではありのすさびに見棄てたりしを、今よりは千とせのかたみと思ふに、そぞろうちまもられて流れ落つる涙の、水莖の跡にそそぎそふる心地すれば、

殘れとて殘しも置かぬ筆の跡を、

形見と知らで形見とぞ見る。

いでや光ことなる玉の聲は、うづもれぬ名と共に後の世までも聞えて傳はらむものから。

〔檜園文集〕

一 春 月

そこはかごなく
しくものもなき
云々
照りもせずくも
りもはてぬ春の
夜の臘月夜にし
くものぞなき。
(新古今集 大江
千里) あくがる
あらましごこ
あいなし

梅はとくうつろひて、櫻はまだしき程、つれづれとながめ暮したる空に、めづらしくさし出でたる月のにほひ深う、そこはかとなく霞みあひたる梢どもの、いとどなまめかしう身にしみて覺ゆるは、げにしくものもなき夜のさまになむ。かやうなる夜に思ふ人と山里わたりあくがれありかむに、彼方よりも笛吹きすさびなどしつつ來あひたるけしきも覺束なき程の月影、いかになまめかしうをかしかりなましなど、あらましごとに思ひつづくるもあいなきすき心なりや。更けゆく風はまだいと寒きに、簾はおろしたれど、いもねられず。やうやう夜も短きほど覚えて、山寺の鐘の音におどろき顔なる鶴の聲もをかしう聞ゆ。またも立出でて見れば、入方の空は

たゞたゞし

ましていと深う霞みて、月の行方もたどたどしきに、すこし明りゆく山ぎはのけしきは、まことに千千の黄金にもかへつべくなむ。

いづら
三つの逕

世をへだてたる住家は、庭の草だに搔拂はぬを、夏來てはいとど茂りそひて、野べもひとつに踏分けがたくぞなりにたる。いづら三つの逕はと辿りくる人もなければ、つくづくとながめ居るに、撫子・さ百合などの植ゑもせぬが、ここかしこ咲きまじりたるもをかじきを、雨うち降りてこぼる露のいとしげきは、見る目も涼しく、いぶせし心も慰みぬべし。やうやう夏ふかくなり行くままに、夕つかたなど、ほのかに蟲のこゑの聞ゆるは、秋來たらむ後、いかばかりならむと思はるるに、拂はぬ草もかひありてなむ。

二 夏 草

三 漁 郷

あまのすみかばかりあはれるものはなし。いとたよりなき海邊の風もたまらぬ松かげなどに、ただかりそめにつくりたる藁屋どものさま浪うちよせなばやがて流れも失せぬべう、いとはかなげに見ゆるを、繪にかきすさびたるなどは、なかなかにをかしきものから、さてすまひなば何心地かせましと思ひやるだに心細し。夕つ方など、年老いたるをのこの手がらみしたるが磯邊に立ちて、けふはいとおそくもあるかななどいひつつ、沖の方をまぼりをり。うまごどもにやあらむ、まさごの上をはしりありきつつ遊びゐたるに入日さしたる島かげより、三つ二つ歸りくる舟の楫引きをりてほこらしげなるを、老人まちえ顔に打ちほほえみたるは、さち多かりしにやと見ゆ。渚に寄せて飛びおるるままに、綱繩寄せなど、とかくしつつののしるに、男も女もあまた出できて、大きな籠に魚ど

ののしる
まちえ顔
引きをりて
まぼりをり

さはいへぎ
くぐつ
も取入れつつ荷ひもて行くさま、さはいへどにぎははしげなり。ぐつめく物もて来て、ちひさき魚三つ四つ請ひもて行くわらはなどもあり。すべて人多く立ちこみ騒ぎて、舟のあたりかしましく、さし寄りて覗くべうもあらず。いと長き網の渚にかけほしたるを繰りためて取入れなど、やうやう静まりゆけば、此方かなた火ともしたるすきかげ壁もあらはにていとあはれに見ゆ。一夜やどりて見れば、浪風のひびき枕をゆすりて、つゆまどろまれず。曉がた隣の家家目さまして、なりはひのことどもなるべし、あやしう聞きしらぬことどもを、おのがじし聲高に言ひかはしたる、げにあまのさへづり、めづらしうもをかしうも。

そや
寺寺の初夜の鐘のひびきもをさまりて、皆人も寝たるに、いとう

かかぐ
さうし
あだしき
心ゆく
れしう、燈火あかくなして文机に打向ひたる、いみじう心すみて、晝見たりしあたりの、何ごころなくて過ぎにしも思ひ知られて、深き心ばへあるくだりくだりも、おのづから解き得らるかし。かかげつくしてもなほねぶたさも知らず、油さし添へつつ見もてゆくに、遠き世の人もたださしむかひ語らふ心地す。さうしつくりて、をかしきふしぶし、あるは、ふと思ひ得たることなどをば、墨おしすりつつ書きつけなどするもをかし。とりのこゑは夜深きにやと思ふに、いととく明けはなれたる、しばしとて打ちねぶる夢のうちも、あだしごとならむやは。

五 幽 夕

遠山寺の入相の鐘、ねぐらにかへる夕鶴も、いつしか聲しづまりて、むかへる文卷もやうやう見えずなりゆくに、心ゆくわたりはい

と口惜しきものから、しばし打ちおきて、はしつ方に出てれば暮れのこれる梢どものほのかなる山のはに、僅にあらはれたる三日月の影こそいとをかしけれ。青鷺とかやいふ鳥の、あやしき聲に啼きゆくが、何となく物寂しげなるを來むといひつる友はた暮過してやと思ふも心もとなきに、燈火かかげたることまづ嬉しけれ。

六 山家の興

山里のすまひは寂しきやうなれど、さるかたになれねれば、なかなかにをかしうなむ。さるは花もみぢの色香はさらなり、鳥蟲の聲につけても、おのづから心を慰むるくさはひ多く、松の柱、竹の編戸、小柴垣ゆひめぐらしなど、よろづの調度さへいたうことそぎて、庭なども、ただ自らなる巖のたたずまひ、軒近く滴る水を古木のうつぼめく物にうけ溜めたる、飯炊くにも、手洗ふにも、ただ此の水にて

こと足りぬ。まれまれ訪ひ来る人はたあるじまうけなどいふこともせず、蕨・土筆などの折に従ひ處につけたる物して、手づからかめる白酒すすめなどす。同じき物語も人聞き憚るべき事しなければ、心にのこす隈もなくて、醉ひすすみぬれば、やがて打ちつれつつ、たださながらなる打解け姿にて、そこはかとなくあくがれありきなどするも、住まではれは、「とか言ひけむやうに、又なく心ゆきて、命も延ぶるやうになむ。

住まで云云
山深くさこそ心
はがよふとも、
すまであはれは
知らむものはかは
(新古今集、西行
法師)

七 書

夏の日の暮れがたきをも知らず、冬の夜の長きをも覚えぬは、書見る心の樂しさになむありける。さるは道道しき筋のはさらなり、家家に記せる何くれのふみ、又かりそめの筆すさびなど、いとさまざまかる中に、わが立てる筋ならぬも、見もて行くままには、用

さらなり

あるじまうけ

くさはひ
調度
ここそぐ
うつほ

ある事どもありて、かにかくに飽かず面白く樂しきは書に如くもの又なかりけり。遠き世のを見るほどは、我もその世にある心地して、やがてその人人を友となして打語らふ心地さへせらるるを、我も筆とりてよしなしごとも書きつくるが、たまたまも散りばひ残りて、後の世に傳はらば、今の古を見るが如く、後の人はた我を友とせむには、千年の末にさへ知る人ある心地して、いとをかしくなむ覺ゆる。よろづの心やれるわざ、いとさはなれど、ただひとりゐてあかず樂しきは、書の外に又何かはあらむ。あるが上にもあらまほしきは書なりけり。と鈴屋翁のいはれたるはげにすることにこそ。

鈴屋翁
本居宣長。

〔藤簾冊子〕

一 中 秋

八月十日より五日、あしたより空いとよう晴れたり。故郷人誰かれ、こよひ月見むと語りあふ。野や分けまし、棹やとらせむといふ。翁、今は都住ひして、野山の秋乏しくもあらじみをつくしのほとりまで漕がせむにはとて、軽らかる舟もとめて、酒よき物などはととのへたるべし、五百つ舟つどふ中を漕ぎそけて、河尻に漂ひ出でぬ。月はやく生駒根にいでたれば、夕汐みちたたへ、風そよめくにぞ、蘆の浦回きたなくもあらず。武庫の高嶺に入日のにほひ残りて、西の海はろばろと見渡さるるに、帆手打ちつれて入りくる大船、いさりすとや、漕ぎいづるちひさき舟、秋の木の葉のみだれに散りうきたり。鴉のいづこにか、やどりさだめて飛びかへる空、鷗のあさりすと

みをつくし

五百つ舟

いさり

榜ひれ

あひな
木の芽

面ふせ

降りぬる渚、さしくる汐の波がしらに躍る魚の光は、昔もあまたたび見しを、この夕あそびそむる心地せられて、いともたのし。おのれより先に浮べし舟、あとより追ひくる舟、皆千里の外に心を遊ばしむとぞ見ゆる。絲あり、竹あり、じらべいとをかしうて、海の神を驚かしつべし。月はいと花やかに澄みわたるほど、宮人のかくる榜ひればかり雲もなびかず、星の林の紅葉も今宵の光には負けたりな。

風いささか吹きいでて、波のあや、いとよう見きはめらる。暮れはてねれば、めぐれる山はをぐらうなりて、淡路島さすがに見えずなりぬ。友垣一人がいふ「こよひの遊、たれたれも心くまなくこそおはすらめ。から歌・やまと歌きたなげなりとも打ちうめき出でばや。翁まづよめ。」といふ。「あひなの言や。翁が木の芽煎て、はかなう荒める心に何ごとかまねび出でむ。舟のよそめばかりに、歌や文やはかなう遊ぶらむと見おこせたらむを、譽にしてやみなまし。このさしあう

棹にさはるは云々
水底の月のうへ
より漕ぐ舟の棹
にさはるは桂なるべし。
(土佐日記)

ふげる影にも面ふせつべき業なれ。」といふ。一人が高らかに「棹にさはるは桂なるべし。」とうたふ。人人これをあはれがりて、歌よまずなりぬ。

月は中空に輝きてあかあかと澄渡りて、常世のまろうどの、かりかりと鳴きて來たるぞいと珍しな。海の色は青にびの衣ひきはへたらむごとに、さすがに風ひややかなれば、衣かさましといふべき人もなきわたりに、飲みほし食ひみちて、すずろ寒しな、かへらやと舟ばたを叩きて、楫とりにも歌へといふ。かれも醉ひたれば、棹の歌をかしげに歌ふ。須磨よりや明石よりや、吹く西の風に誘はれて、漕ぎもて歸るほどに、夜は丑みつばかりにやなりぬらむといふ。

二 聽 雪

あはれあはれ、老いたる人ばかり見ぐるしく口をしきものはあ

らず昔は都べの雪いかならむと、風だにさむく、雲の立ちまふ夕べ
は、出でや立たましなど思を動かししに、それざることにて、この四
年ばかりいにしへ、こここの宿もとめて住みつきぬる時までも、睦月
その日、雪いとふかう降りつみたるを待ちよろこべる友どち二
人三人かいづらねて、消えがてまでも野山にまじりしは、ただ昨
日のごと忘れぬを、かうも衰へけりな、都を雪のふる里にせよと、あ
る人のよみて聞えられしに、又小澤の翁の、いかにながめつらむと
て、

かつ咲きて、かつ吹きちらせ、花よりも

花なる庭の松のしらゆき。

となむいひ送られしかば、

咲くと散る風のながれのあやしきは、

空目の花の林なりけり。

とかへし聞えしなど思ひ出でらる。今は目こそ疎けれ、足こそなえ
たれ、この降る雪に物ばかりは言はむとて、紙・すずりとう出たれど、
指は龜のごとがまりて、筆あゆますべくもあらねば、おき火かい
まさぐりつつ、こし方をしぬび、今をうちなげきては、例の繰言する
なむいとはかなしや。

かんな月、時雨に染めし木の葉の散りはてて後は、野山は色なく
なりもて、高きいやしき、おのが程程に冬ごもりして、春を待つこそ
わりなけれ。あしたより雪けしきだち、嵐はげしきに、やれたる窗の
紙は風を啜りて、いといたう寒きに、夕づけて雪やもよほす、物の音
ふつにたえたりしに、ただしとしとと鬼のあゆみくる音するは、雪
か霧かと這ひいでて、北の窗すこし明けて見たれば、ほどなき庭を
さしおほふ隣の松が枝の葉に、いと白う降積みたるを見るにも、い
でいかで出でや立たまし。いとあやしき埋火たきつぎ、湯たぎらせ、

小澤の翁
小澤蘆庵。

木の芽の香のみすずろひをり。あはれ、よそめ如何にかさうざうし
からむ。

三 古戰場

昔、靜の舍のうし、難波の大城もるつらに召し加へられて、まう上
り給ひし時、信濃の國、桔梗の原といふ所を過ぎて詠ませ給ひし歌、
もののふの草むす屍年ぶりて、

秋風さむし、桔梗のはら。

この歌、賀茂の翁のよしとほめられしかば、友垣の中には、いと譽あ
るものに語りあひ侍りき。その野はや、人の語りしを今おぼし出づ
れば、限もなく廣らなるところなり。西の方の大木蘇・小岐曾の嶺を
越えて、この野には下り来るなり。東は諏訪・和田・碓氷の嶺嶺に立續
きたるべし。それが餘りの山山嶺嶺立繞りたるに行くさくさ、をて
行くさくさ、をて

裏み表み
さやぐ
露は御笠と云云
みさぶらひ御笠
と申せ、宮城野
の木の下露は雨
にまされり。(古
今集東歌)

もこのも、限のありて見ゆれば、さばかりの原野とも思さぬなるべ
し。夏過ぎ秋風吹立ちて、篠・薄・蘆・茅にはひまつはるる眞葛の、裏みお
もてみさやぎ立つ「露は御笠と申せ」などいふべく散亂れしには、道
ゆく人の弓末のみ見え隠れして、はたご馬の行く行く人住まぬ霧
の籬に立隱るる、ここなむ甲斐・越後・この國のますらたけをの戦の
場にて、旗さし物は今見る雲霧の絶え絶え靡くに似て、弓・矛・劍・刀の
亂は尾花・高茅よりも激しく、大笛小笛の音は在處定めずすだく蟲
の音か、吹渡る風の聲か、仇が打つ鼓か、心地まどひぞしぬべき。けふ
は彼方に勝ちほこり、あすは又うしろを見せて追討たるるよ、その
仇むすびし初をとへば、深き怨のあるにもあらず、かたみに龍の雲
にのりて空をかけり渡らむと、驕り奢れる心の淒じきがなすにこ
それ。流るる血はいささ川とせかれ、碎くる骨はざられ石とも敷
きみちぬべし。かくて年ふりたらむ後は、このあらがねの土の下は、

かたみに
かたみに
いささ川
ざられ石
あらがね

ひぢりこ

ことごと屍の積み埋みたらむが上にこそと、ふと思へば、身の毛たち、冷たき汗は衣を徹すべし。しか心惑ひしては、霧原・望月の野に放ちかふ駒の嘶きにも驚かる。殘れる暑さの空に流るる星の行方を鬼火とおそれ、行手や近き、こし方やなどおもひまとふを、心しづめて思へば、われその仇か、彼を敵とも怨むべきにあらず。大君の御垣の内つ國なりとも、いづこの土か人の骨の埋れたらざらむ。年をふり、土に歸りては、春のあら小田すきかへすより、千町のおくて刈りをさむるまで、男女の汚れまみるるひぢりこにも、そのいみじき物まじれり。今までのあたりならずとも、賢き人はおぼし知るらむ。あなはかなあないみじ。

〔奥の細道〕

一 逝く春

百代の過客

月日は百代の過客にして、行きかふ年も亦旅人なり。船の上に生涯を浮べ、馬の口とらへて老を迎ふるものは、日日旅にして旅をすみかとす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて、漂泊のおもひやまず。海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に白河の關こえむと、そぞろ神のものにつきて心を狂はせ、道祖神のまねきにあひて、取るもの手につかず、股引のやぶれをつづり、笠の緒つけかへて、三里に灸するより、松島の月まづ心にかかりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移る。

草の戸も住みかはる代ぞ、雛の家。

そぞろ
道祖神

三里

末の七日

ものから

彌生も末の七日、あけぼのの空おぼろおぼろとして、月は有明にて光をさまれるものから、富士の峯かすかに見えて、上野・谷中の花の梢、また何時かはと心細し。睦じきかぎりは宵よりつどひて船に乗りて送る。千住といふ所にて船をあがれば、前途三千里のおもひ脇にふさがりて幻の巷に離別の泪をそそぐ。

ゆく春や、鳥はなき、魚の目は泪。

これを矢立の始として、行く道なほ進まず。人人は途中に立ちならびて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。今年元祿二とせにや、奥羽長途の行脚、ただ假初に思ひ立ちて、吳天に白髪の恨を重ぬといへども、耳にふれて未だ目に見ぬ境、もし生きて歸らばと、定めなき頼みの末をかけ、その日漸く早加といふ宿に辿り著きにけり。瘦骨の肩にかかる物まづ苦し。ただ身すがらに出立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、浴衣・雨具・墨・筆のたぐひ、あるは、さりがたきはなむけなどしたるは、さすがに打捨てがたくて、路次の煩となれることわりなけれ。

矢立

行脚

身すがら
紙子
はなむけ

直道

わりなし

二 那須野の原

那須の黒羽といふ處に知人あれば、これより野越にかかりて直道を行かむとす。遙に一村を見かけて行くに、雨降り日暮る。農夫の家に一夜をかりて、明くれば、また野中を行く。そこに野飼の馬あり。草刈るをのこになげきよれば、野夫といへども流石に情しらぬにはあらず。いかがすべきや、されども此の野は縦横にわかれとうねうねしき、旅人の道ふみたがへむ、あやしう侍れば、この馬のとどまるところにて馬を返し給へと貸し侍りぬ。ちひさきもの、馬のあとしたひて走る。ひとりは小姫にて名をかさねといふ。聞馴れぬ名のあやしかりければ、

かさねとは八重撫子の名なるべし。

やがて人里に到れば、あたひを鞍壺に結びつけて馬をかへしぬ。

三 平 泉

五月十二日、平泉と心ざしあねはの松、緒だえの橋など聞傳へて、人跡稀に、雉兔芻蕘の往きかふ道、そともわからず、終に路ふみたがへて、石巻といふ湊に出づ。「こがね花咲く」と詠みて奉りたる金華山、海上に見渡され、數百の廻船入江につどひ、人家地を争ひて、竈の煙たち續きたり。思ひかけず、かかる處にも來れるかなと宿からむとすれば又知らぬ道まどひゆく。心細き長沼にそうて、戸伊摩といふ處に一宿して平泉に到る。その間二十餘里程とおぼゆ。

三代の榮耀一睡の中に、大門の跡は一里こなたにあり。秀衡

が跡は田野になりて金雞山のみ形を殘す。まづ高館にのばれば、北上川南部より流るる大河なり。衣川は和泉が城を巡りて高館の下にて大河に落に入る。康衡が舊跡は衣が關を隔てて南部口をさし固め、夷を防ぐと見えたり。さても義臣すぐつて此の城にこもり、功名一時の叢となる。國破れて山川あり、城春にして草青みたりと、笠うち敷いて時の移るまで涙を落し侍りぬ。

夏草や、つはものどもが夢の跡。

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を殘し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散失せて、珠の屏風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虚の叢と成るべきを、四面新に圍みて、甍を覆うて風雨を凌ぐ。暫時千歳の記念とはなれり。

五月雨の降りのこしてや、光堂。

雉兔芻蕘

こがね花咲く
すめろきの御代
榮えむご、東な
るみちのく山に
黄金花咲く。(萬葉集、大伴家持)

まごし

國破れて云々
國破山河在、城
春草木深感時
花濺、涙・恨
別鳥驚心、烽火
達^{三月}、家書抵
萬金白頭搔更
短渾欲不勝
譽。(杜甫)

四月山

木綿しめ

四

干將・莫耶
千將莫耶古之良
劍也。(荀子)行尊僧正云云
もろごもにあれ
さおもへ山櫻、
花よりほかに知
(金葉集、行尊)

六月八日、月山に登る。木綿しめ身に引きつけ、寶冠に頭を包み、強力といふ者に導かれて、雲霧・山氣の中に氷雪を踏んで登ること八里、更に日月行道の雲關に入るかと怪しまれ、息絶え身こごえて、頂上に臻れば、日没して月顯る。笪を鋪き篋を枕として、臥して明くるを待つ。日出でて雲消ゆれば、湯殿山に下る。谷の坊に鍛冶小屋といふあり。この國の鍛冶、靈水を選んで、ここに潔齋して劍を打つ。終に月山と銘を切つて世に賞せらる。かの龍泉に鍛へて淬すとかや。干將・莫耶の昔を慕ふ道に、堪能の執あさからぬこと知られたり。岩に腰をかけて、しばしやすらふ程に、三尺ばかりなる櫻の、蕾なれば開けるあり。降りつむ雪の下に埋れて、春を忘れぬ遲櫻の花の心わりなし。炎天の梅花ここに馨るが如し。行尊僧正の歌のあはれも思ひ出で、猶まさりて覺ゆ。すべて此の山中の微細、行者の法式として他言することを禁ず。仍つて筆をとどめて記さず。坊に歸りて、阿闍梨の需によりて、三山順禮の句を短冊に書く。

涼しさや、ほの三日月の羽黒山。

雲の峯幾つ崩れて、月の山。

語られぬ湯殿にぬらす袂かな。

五 北國日和

福井は三里許なれば、夕飯したためて出づるに、黃昏の路たどたどし。ここに等裁といふ古き隱士あり。いづれの年にか江戸に來りて予を尋ぬ。はるか十年餘なり。いかに老いさらばひてあるにや、はた死にけるにやと人に尋ね侍れば、今に存命して、そそこと教ふ。市中ひそかに引入りて、あやしの小家に夕顔・絲瓜のはひかかりて、鷄頭・簾木に戸ぼそをかくす。さては此の中にこそと門を叩けば、わ

老いさらばふ

路の枝折

びしげなる女の出でて、「いづくより渡り給ふ道心の御坊にや。主はこのあたり何がしといふ者の方に行きぬ。若し用あらば訪ね給へ」といふ。かれが妻なるべしと知らる。昔物語にこそかかる風情は侍れど、やがて訪ね逢ひて、其の家に二夜泊りて、名月は敦賀の湊にと旅立つ。等裁もともに送らむと、裾をかしうかかげて、路の枝折とうかれ立つ。

かくて十四日夕ぐれ、敦賀の津に宿を求む。その夜月殊にはれたり。あすの夜もかくやあるべきといへば、越路のならひ、なほ明夜の陰晴はかりがたしと。主に酒すすめられて、氣比の明神に夜参す。仲哀天皇の御廟なり。社頭神さびて、松の木の間に月の洩入りたる、御前の白砂霜を敷けるが如し。

十五日、亭主の詞にたがはず、雨降る。

名月や、北國日和さだめなき。

十六日、空晴れたれば、ますほの小貝ひろはむと、種の濱に舟を走らす。海上七里あり。天屋某といふもの、破籠・小竹筒などこまやかにしたためさせ、僕あまた舟にとりのせて、追風、時のまに吹著きぬ。濱はわづかなる海士の小家のみにて、侘しき法花寺あり。ここに茶を飲み、酒をあたたむ。夕ぐれの淋しさ、感懷に堪へたり。

寂しさや、須磨にかちたる濱の秋。

その日のあらまし、等裁に筆をとらせて寺に残す。

路通も此の湊まで出迎へて、美濃の國へと伴ふ。駒に援けられて大垣の庄に入れば、曾良も伊勢より來り合ひ、越人も馬をとばせて如行が家に入り集まる。前川子・荆口父子、その外したしき人人、日夜とぶらひて、蘇生の者に逢ふが如しかつ悦び、かついたはる。旅のもうさも未だ止まざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮拜まると、また舟に乗りて、

破籠
小竹筒
したたむ

蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ。

青によし

〔鶉 衣〕

自序

あやしくはえもなきされぎれをあつめつづりたるを、うづら衣
とはいふなり。げに、その鶉ならば、ただ深草の深くかくろへて、かり
にだも人には知らるまじきものにこそ。

一 奈良團扇の贊

青によし奈良の帝の御時、いかなる叡慮にあづかりてか、この地
の名産とはなれりけむ。世はただ其の道の藝くはしからば、多能は
なくともあらましかれよ、かしこくも風を生ずるの外は、たえて無
能にして、一曲一奏の間にもあはざれば、腰にたたまれて公界に譖
ふ拗心ねじまごころもなし。ただ木の端と思ひしてたる雲水の生涯ならむ。さる

は桐の箱の家をも求めず、瓢がもとの夕涼、晝寝の枕に宿直して、人の心に秋風たてば、また來む夏をたのむとも見えず。物置の片隅に紙屑籠と相住みして、鼠の足にけがさるれども、地紙をまくられて野ざらしとなる扇にはまさりなむ。我汝に心をゆるす。汝我に馴れてはだか身の寝姿を、あなかしこ人に語ることなかれ。

袴著る日はやすまする團扇かな。

二 長短の解

百八十七曲
そなたご身共が
命は五百八十一年
七廻り。近頃めでたい。(狂言)

大はよく小をかね短は長にまかるるためし、世にそのたぐひ多かり。たゞ、君を賀し人を壽ぐにぞ、よはひを長濱の鶴にたぐへ、あるは龜の尾山の尾を引きて、五百八十七曲と祝ひものするには、あく方あらじかし。その餘はひたぶるに十八大角豆のゆたけきにならへば、獨活の大木の謗を遁れず。出る杭、頭うたれてつひの益なく、下

手の談議のまとまり兼ねては、軒の柳も眠り顔なり。たゞ女の髪こそめでたくあらましを、手長き人は一門にも遠ざけられ、鼻の下の伸びすぎたるは大事の相談に漏されて、その夜の餧飪の長きを知らず。されば、必ず長きは短きが上にも立ちがたし。物はただ、秋の夜の長くてよからむは長く、難波渴みじかき蘆の長からずしてよきは短くてあらなむ。天地もと窮屈ならず、長短は自然にそなへて寸分の詮議なし。摺粉木は両手に握るを程とし、杓子・才槌は片手に足れり。下ざまの物ながら、天理のままなるぞ尊けれ。わが友田氏、過ぎし比、かりそめの旅のつとに煙管を贈れり。その短きこと掌にかくすべし。我この秋西郊にあそぶ事ありて、調法はなはだ長きに勝れり。これをくはへて手を藉らず、久しくして歯を勞せず。行く行く野山に雲を吹き、あく時は袖にをさむ。張子が馬を懷にするが如し。ここに於て感あり、遂に長短の解をつくりて、これを酬ゆるの詞に代

ふ。その辭の長すぎたるは、また才の短き故ならし。

三 乞食畫の贊

豫讓
晋の人。智伯に仕へしが、智伯に殺されたり。豫讓乃ち姿を變じて趙襄子を窺ふ。遂に襄の兵に殺さるるまで嘗てその志を變ずることなかりき。

まほる
もとより小町が身の果にもあらず、豫讓が忠のやつしにもあらず。君よく之を忘れずば、厨に肥肉を遠ざけて、仁政野邊の草葉に及ぶべく、臣よく之を忘れずば、つねに飽温の恩澤を省みて、報國の志もいかでかここに起らざらむ。近く治世の明け暮れとても、これを見かれを思ひ知らば、花に一盃の望は足り易く、雪に鰯汁の奢やむべきをや。あはれ世の人心、蟹の目の上にのみつきて、猿の手の及ばぬ方にのばすらむを、あが佛を香華にまぼりて、その黄金の肌を羨むよりは、ただよし之を起居に眺めて、薦一枚を忘れざらむにはと、みづから座石に畫贊す。

四 自ら名づく

遁世の姿すでに定まりぬ。さてはうき世の名にもあらじ。さるべき二字に改めばやと、名を思ひ字を選むに、今は父母も世にまさず、官路もいとひ離れたれば、忠孝の字義をとらむも後のまつりとやいふべからむ。よし又四書・古文の抜書も、普く人の取盡し、まして歸去來の辭など、あらゆる隱者のむしり取りて、骨ばかりに喰ひちらしたり。さらば博識の門に乞はば、意味深長の二字もなどあらざるべき。されども、これは耳遠ければ、名は如何と問ひ聞かむ人の頓に心得ぬ顔の口惜しく、骨折の詮なき心地すれば、これは其の書の誰が言なりなど、一人一人に講釋せむはいとむづかしかりぬべし。菩提の道も疎ければ、西念淨蓮にてもあるべからず。されば世の人の上を見るに、金藏といふも貧に責められ、萬吉も不幸はのがれず、玉といふ下女光もなく、かるとつけても尻重し。名はその人によらぬ

ものかもよしさらば、丁稚走女も覺よく、姫も娘も書き易からむをと、この日、人のもとへ消息の筆にまかせて、暮水とは書き始める。それだに人の味ひて、これは何の心にて、それは此の語によるならむと、蛇に足をそへ、摺粉木に耳をもはやして、自然と深き字義にも協はば、それも亦をかしかりぬべし。

へちまとは、へちまに似たで、絲瓜かな。

五 節分の賦

すだく

今宵は鬼のすだく夜なりとて家家に燭の頭・柊さしわたす。わが大君の國のならはし、いづくか鬼のすみかなるべき。昔の聖は衣冠して、殊にこの夜をつつしみ給ふとこそ。世を遁れたる翁の炬燵に足さし渡し、年を惜しむの外に何のわきまへたる事もなきこそ、なかなか安かりけれ。今は捨てたる世に似げなきわざながら、家に老

いたる男のかがめる腰にしほたれ袴かけて、けしきばかり豆うち散し、聲わななきて鬼やらひたるも、昔覚えてをかし。年の數を豆に拾ひて厄拂ふ者にとらするものとて、おのがさまざますることなるに、昔は膝のあたり、かい探りてもその數は得たりしが、今は八疊の一間にも餘るばかりになりにたるぞ侘しきや。厄拂ふ男の宵は町町を廻りし後、夜更くるほど、聲よびからして、此のわたりへも音なふことにぞありける。行く年波のしげく打寄せて、形みにくう、心かたくなに、今は世にいとる身の、老はそとへ打出されたるこそ、せめての幸なれ。

梅咲くや、福と鬼とのへだて垣。

六 蟬の引

三伏の日ざかりの暑さに堪へがたくて、

三伏

口づさぶ

蟬あつし、松きらばやと思ふまで。
と口づさびし日數も程なく立ちかはりて、やや秋風にその聲のへ
りゆくほど、さすがあはれに思ひ返して、

死にのこれ、一つばかりは、秋の蟬。

七 膽の頌

膽を不用の物なりとは、我も誇りし人の數なり。されば他の一寸
は見えて、わが一尺は見えずとか。世に益なき物くらべせむには、ま
づ我こそ先なるべけれ。そもかの膽は物やは食ふ、素餐の謗もなし。
さらば物やは言ふ、三緘の警にも及ばず。人の肢體に不用を論ぜば、

男の乳ばかりこそ、如何なる益のあるとも見えねど、今更これ等を
取拂はば、腹は渾沌王の佛して、世にすげなきものなるべし。いでか
の膽は頓死急症の證方なきにも、まづとて之に灸する時は、泉下の
の膽は頓死急症の證方なきにも、まづとて之に灸する時は、泉下の

素餐
戸位素餐。

すけなし

腹のさしも草云
たた頼め、しめぢ
が原のさしも草、
われ世の中にある
むかきりは。
(觀世音の歌といふ)

首途を留むる例も多し。さてこそ「腹のさしも草ただ頼め。」とも詠み
給ひけむ。たとへ項羽が山を抜く力も、この垢を取れば、忽に落つと
ぞ。痛悔膽を喰むとは漢文の古語にして、わが朝に人を嘲りては膽
が笑ふとも言へりけり。然るにつましき隠居ありて、膽がねといふ
を溜められしより、天津空の鳴神も好もしがりて、いかでこれ擗ま
むとし給ふより、女子・わらべの氣遣ふ事は、麝香の狩人を恐るるに
も超えたり。昔、祖翁の故郷に歸りて、「膽の緒に泣く年の暮。」と懷舊の
袖を濡らせしは、耳も及ばじ、鼻も及ばず。彼は斯く風雅にも大功
あれば、今日より只彼を誇るまじとぞ。

友とせむ、膽もの言はば、秋の暮。

祖翁
松尾桃青
膽の緒に泣く
故郷や膽の緒に
泣く年の暮。(併
譜七部集)

もの言はば
物言へば唇寒し、
秋の風。(芭蕉)

〔現代文〕

一 平重盛論

小松の内府重盛は、げに智・仁・勇兼備の大臣なりき。この點より見れば、彼は平家第一等の人物と謂ふべかりき。唯理に明かなるに較ぶれば、その意は寧ろ弱く、その情は寧ろ脆かりき。彼がその材能を發揮して遺憾ながらむが爲には、少くともその意志は更に數層の強烈を要したりき。加ふるに早く佛説に歸依して現世の無常を觀ぜしが爲に、奉公の大義に於て聊か缺くる所あるを免れず。この人にしてこの弊あり、洵に惜しむべしとなす。

四十三年の齢は、重盛に於て決して短きものに非ざりき。平家の興るや、彼實にその樞軸たり。平家の榮ゆるや、彼實にその柱石たり。彼の一生は、父入道の事業と共に、平家史の大半を語るものなり。清

重盛に待つ
帷幄
宗師

人後に落つ
せば
知るべきのみ
提唱

樞軸
柱石
奉公
洵に
歸依

盛心剛に情強く、眞に一世の豪傑なりしが、その事を成すに當りて、重盛に待たざること殆どあらざりき。戰陣に臨みては危きを矢石の間に救ひ、帷幄に參しては畫策を百里の外に運らし、世靜まれば儀禮。彼によりて備はり、道衰ふれば大義。彼によりて正されき。彼は啻に平家一門の柱石たりしのみならず、又世道の名鑑たり、君國の宗師たりき。藤氏衰へてより世に人傑なし。重盛實にその第一の人なりき。

惡源太義平と紫宸殿の階下に鬪ひし重盛は、如何に勇しかりけむ。彼武藝に於て人後に落つるものに非ざりき。信賴平家の不在を窺うて亂を起すや、熊野參詣の途上にありし清盛を始め、平家の一族は寧ろ西國に走りて再舉を圖らむと欲したりき。かの時、平家にして直に都に歸らざりせば、天下の事ほぞ知るべきのみ。この時に當つて、衆論を排して入京を唱へ、大義名分を提唱して士氣を鼓舞

當に
(將、正)

蚊龍

開山

標柄

儀仗

四恩

我執

纏沮む
(僅)

悲劇

希求

際遇

云爲

冥冥の後

したるは實に重盛なりき。されば平治の勝を論ずれば當に功一級たるべきもの實に重盛なり。唯この一勝あり、平家の勢はさながら蛟龍の雲に乘じたるが如きものありき。さればこの氣運を致したる重盛こそは、正しく一門興隆の開山とも稱すべけれ。

世は既に平家の世となりて、四海の權柄入道が掌裏に在り。重盛が天分ますますその光輝を放ちぬ。今や彼一武人にあらずして、朝廷の輔弼たり。公私内外の間に處して、君國の大事を辨すべき者、實に彼を待つて始めて人ありき。その男資盛關白の儀仗を冒して辱しめられし時、入道は大いに怒りて暴慢の復讐を試みしが、重盛は深く慚愧し、資盛を放つて世に謝しき。鹿が谷の事ありて成親の斬られむとせし時、一國の重臣、私臣の成敗に任ずべからざるを説破せしも重盛なりき。事延いて法皇幽閉の舉あらむとするや、四恩の道理を引いて君臣の大義を訓へしもの、亦重盛なりき。入道が我執

の一念は幾度か之が爲に沮まれて、君國のこと爲に纔に安らげきを得たり。かかる間に忠孝の兩全を期し、公私の事無きを謀れる重盛が心事の如何ばかり苦しかりしかば、察するに餘ありと謂ふべし。あはれ入道が榮華は壯大極り無かりしが、その裏面には、その愛子を犠牲とせる慘澹たる悲劇ありき。重盛年なほ壯にして、夙に厭世の心を動かし、早く佛說に歸依して來世を希求せしもの、その際遇のおのづから然らしめし所、その情や憐むべしとせむ。

されど彼の佛說に歸依せし事は、寧ろ恨事なりしと謂はざるを得ず。かれ身は一國の大臣として奉公の大義を辨ずる者、宜しく忠を勵み道を盡し、斃れて而して後已むべきなり。洵に忠孝兩全の歎ありて、骨肉の私情、流石に絶ち難きものありしとも、事體の大小、云爲の先後、必ずしも辨じ難からず。何ぞ妄に一身の安慰を冥冥の後にのみ求むべしとせむ。この難關に當りて能く功を擧ぐるもの、眞

に人傑といふべきなり。重盛たるもの輕しく事局を回避して、自ら全うすべからざりしなり。彼の熊野に禱る詞を見るに要は「一門の榮華永きを保たじ、寧ろ死してその末路に遭遇せざらむ。」と謂ふにあり。何ぞその願の私情に拘はる事の多くして、公義に盡す事の少きや。彼の一身は公私内外の望の依つて繋がるところ、君は以て泰きを得、父は以て正しきを得。洵に一門の柱石、一世の儀表たり。彼死せば、入道が暴横は、さながら悍馬の御に離れしが如くならむ。帝座の危きや知るべきなり。彼死せば、一家の望、立所に世に離るべし。

一旦事ある日、誰か擁護の任に當るべき。一門の危きや亦知るべきなり。重盛一身を以てこの大局を保持す。苟もその任を知り責を重んずるもの、何ぞ區區の私情の爲に逃避すべけむや。重盛その希世の聰明を以てして、如何ぞかばかりの理義を辨ぜざらむ。辨じて而して尙是を敢てせざるものは、その佛説に歸依したるの致す所と

希世

儀表

御に離る

公義

龜鑑

耳順

明を待つて知らざるなり
院宣

謂はざるべからず。是重盛に取りて一大恨事に非ずして何ぞ。

世の忠孝の龜鑑として重盛を論ずるものは、吾人の同意する能はざる所なり。その情や憐むべし、その行や即ち大いに未だし。殊に平家盛衰の側より見れば、自ら求めてその身を殺したるは、即ち自ら求めてその家を亡ぼしたるに等し。入道心剛なりと雖も、齡已に耳順を越ゆ。その身後に於て、誰か一門統率の任に當るべき。凡庸宗盛の輩の素より爲す無きこと、重盛の明を待つて知らざるなり。加ふるに諸國の源氏外に機を窺ふあり。院宣一たび下らば、天下の事俄に知り難し。重盛この危機に際して、何ぞ自ら重んぜざりし。文覺の賴朝に説ける言に曰く、「平家には小松の大臣殿こそ、心も剛に謀も勝れておはしあが、平家の運命茲に極まるか、去年の八月薨去せられぬ。今は何の憚る所ぞ。御邊一たび起つて麾かば、天下靡然として従はむ。」と。平家の存亡一に重盛の上に懸りし事、亦以て想ふべ

豫て亡き身

きに非ずや。あはれ、世は如何にもあれ、唯力を盡し忠を勵みても猶及ばざらむ時、豫て亡き身のせむ術なからめやは。さるを君父を忘れ、眷族を捨て、偏に一身の安慰を未來に祈願せるこそ心得ね。吾人ここに至りて遂に重盛を辯護するの辭を知らざるなり。(高山樗牛)

二 文化的餘弊

青丹よし
伽藍塞翁の馬
邯鄲の枕頭
祇園精舍
沙羅雙樹

青丹よし奈良の都は荒れはてて、伽藍徒に古の名残を留め、星月夜鎌倉の府は廢れつくして、陰鬼空しく雨に哭す。英雄の骨も朽ちては、また土塊と擇ばず。美人の髑髏時に鋤犁に觸れて出づるも、誰か當年の佛を認めむ。東流の水一たび逝いて復返らず。人間の富貴果してよく幾時かあらむ。塞翁の馬上、歲月徒に過ぎて、邯鄲の枕頭、芳夢はやく覺めぬ。げにや祇園精舍の鐘、諸行無常の聲に響き、沙羅雙樹の花、盛者必衰の色に出づ。萬里の長城未だ全く成らずして、山

東既に亂れ、坑灰なほ溫かにして、咸陽の宮殿三月紅なり。あはれ、萬世無窮と期せし始皇が遺圖も、忽ち二世にして盡きぬ。盛なる者豈に久しからむや。

干戈天下に旁午して、兵馬倥偬、肝腦長へに地に塗れ、腥風到る處に吹きすさぶ間は、文化の芽の萌さむ由もなけれど、一たび馬は華山の陽に歸り、牛は桃林の野に放たれ、堯雨舜風、太平の氣象融融として起るに及びて、文化の芽茲に始めて萌す。太平愈續きて、文化愈進む。文化愈進みて、生活の程度愈高し。所謂治に在りて亂を忘るるの危機、實にこの際に胚胎す。祖先百戰の山河に生れ出でて、目に旌旗の翻るを見ず、耳に鼙鼓の轟くを聞かず、文恬武嬉、安きに慣れて、又危きを想はず。人益利巧になりて、益死の惜しきを知り、欲に趨り利に就き、舌頭には能く風を生ずれども、腕には虱を捾る力だになく、風俗の奢侈に赴くにつれて、人心軟化し、柔化し、終に腐敗す。文化

坑灰なほ溫云云
竹帛烟消帝業虛、
關河空鎖祖龍居、
坑灰未冷山東亂、
劉項元來不讀書。
(焚書坑、
章碣)
十萬降兵夜流血、
咸陽宮殿三月紅。
(虞美人草、
曾子固)

胚胎

文恬武嬉
(文恬武嬉)

虱を捾る

敬虔

阿諛

の餘弊、ここに至りて極まりぬ。一旦緩急ありとも、安んぞ能くこれに當るを得むや。天下は固より殺伐の氣多くしては善く治まるものにあらねど、水靜なれば則ち腐敗す。文化長く續けば、則ち亂世に養成せられたる美風全く消滅す。敬虔の心は阿諛の心となり、剛氣の習は柔弱となり、敦厚は輕薄となり、誠實は詐偽となり、義理は黃金とかはり、忠君愛國の念は自利私欲と變じ、天真爛漫の態は嬌節妖粧となり、かくて國家の元氣内に盡きぬれば、外に一時の盛觀を呈すとも、瓶裏の花の如く、久しからずして自ら枯れむとす。これ別に耳新しき説にもあらず。歴史は實に吾人に向つて常にこれを語るなり。

荒涼

世界の文化は、もと中央亞細亞高原より出でぬ。而して印度は亡びたり、波斯は亡びたり、アツシリヤは亡びたり、埃及も亡びたり。荒涼たる山河、當年の殘礎を覓めむとしても、亦得べからず。歌舞の地

鳥雀空しく悲しみ、古塔月影の寒きに鎖し、蔓草武夫の夢を封づ。夕陽に昔を問へば、悲風千里より來り、荒墳に英雄を弔へば、零露長へに冷やかなり。嗚呼、榮えし國は亡びぬ。文化の最も早く開けし國は亡びぬ。而して、取りてこれに代りし者は、當時未だ榮えず、文化の開けざりし國なりしにあらずや。

漫に文華といふなけれ、漫に開化といふなけれ。文化はなほ酒の如し。酒を飲む者は必ず醉ひ、文化に湎める國は必ず亡ぶ。歴史は正直なり。常に人間に向つてこれを語れども、おぞや、魚市に入りて腥きを知らず。太平の安きに慣れて、人また危きを思はざるなり。嗚呼、國家昏亂して忠臣現れ、天下太平にして小人陸梁す。輕裘肥馬の間に醉生夢死する者、共に古今の興亡を語るに足らず。悠悠たる世路、誰に向ひてか邦家百年の大計を説かむ。一窗の夜雨、そぞろに古を撫し、憤然として眠ること能はず。案を拍ちて大息すれば、孤燈耿と

陸梁
輕裘肥馬
醉生夢死
悠悠
そぞろ
古を撫す
耿として

零露

して三尺の秋水寒し。(大町桂月)

三 大道闊歩

「芳野山枝折もせでや分けいらむ、ふみ迷ひてぞ花は見るべき。」とは、確に一種の雅趣を捉へ得たらむも、吾人は寧ろ之を好事的行徑と斷言するに憚らず。苟も迷路に入らむか、迷路中自ら安心の方なきにあらじ。然も當初より迷路に彷徨せむことを期するが如きは、畢竟、偽豪傑の所作たらざれば、贋君子の行爲たらずんばあらず。寧ろ若かむや、坦坦たる大道を闊歩せむには。

凡そ小説・傳奇・戯曲の類は、大道闊歩にては何等の興味なきが故に、彊めて人生の行路に於て、そのあり得べき事たると、あり得べからざる事たるとを問はず、曲折あり變化あらしむるものあり。然れどもこれただ意外・案外の連出を以て、他の好奇心を挑發せむとする趣向に過ぎず。是豈に實際に於ける訓とするに足らむや。凡そ大道を棄てて曲徑に入る者、これ日蔭者にあらざれば、禍心包藏者のみ。自ら顧みて影に愧ぢざる者、知らず、何の必要ありて之を敢てせむや。頃日、米人ホキットマンの集を読むに、大道歌の長篇あり。その頭の一節に曰く、

孤筇單歩、襟懷爽然として、予は開豁なる大道を踏出せり。
身は健全に、心は自由に、世界の萬象は予の前に展開せり。
褐色の道路は綿綿として遠く連なり、予が脚の向ふ所に任せむとす。

嗚呼、自今予は、復めめしく泣くまじ、低徊遲疑すまじ、餘計なる註文をなすまじ。

室内に於ける婦女子の愁訴や、論議百出せる書籍や、抑亦諸の不平がましき批評や、悉く皆放却せむかな。

健脚、安意、予は大道を闊歩す。

譯文泥の如きも、その意は蓋し此の如きのみ。誰かいふ、坦坦たる大道を闊歩する、些の詩趣なしと。これ、名教の中に樂地を見出す能はざる自棄漢の譖言のみ。

惟ふに、世の中に最も憐むべきは、自箇の踏むべき道路を、他人に向つて聽かむとする者より甚しきはなし。人は生れながら既に自ら行くべき道を覺るべき宿命を有す。然るに之を覺らず、却て傍人の指點を乞はむとするは何ぞや。これ豈に自箇の前に横はる道は迂路にして、他に捷路あるべしと疑ふが爲にあらずや。諺に「急がば廻れ」といふ。吾人は大道を棄てて捷路を求むるの頗る危険なるを思はずばあらず。

然りと雖も、如何なる大道にても、多少の障礙なきにあらず。問題は此の障礙を如何にすべきかにあり。吾人はただ却走する勿れといふ。之に打勝つには、種種の才覚も必要ならむ。方便も入用ならむ。必ずしも一律に定むべきものにあらず。併しながら、意志の存する所必ず手段あり。吾人はその障礙に打勝つの決して不可能たらざるを知るなり。

東海道を京都より東京に歩行する者は、東京に達するが目的なるに相違なし。然れども途中に躓れたりとて決して不幸といふべからず。凡そ人生の愉快はわが目的地に向つて努力行進しつつある間に、一生を了するに過ぎたるはなし。有體に言へば、目的地に到達したる後は却て聊か手持無沙汰の感なきにあらざれば、寧ろ雲煙縹渺の間に之を遠望しつつ躓るるを以て、更に愉快の饒きを覺えずんばあらず。行路に躓るるをして行倒れといふは、畢竟目的もなく、當處もなく、ただ此處彼處に彷徨の餘、精盡き根耗して倒れたるものと意味して、決して目的あり、希望あり、勝利の中に躓れた

るネルソン提督その人の如きを目して、斯くいふべきにあらず。若し之をしも行倒れといはば、吾人は行倒れを以て寧ろ人生の至樂と稱するに遲疑せざるなり。例せば、比公の如きは自ら執務の際にその最後の息を引取らむことを本望としたりしに、新帝と相容れずして去り、その目的を果す能はざりしかば、之を以てその晩節に於ける最大痛恨の事と做したりき。

大道闊歩の中途に斃るるが如きは、眞にその死處を得たりと謂ふべし。乃ち武人が戰場に斃れ、農夫が耒を握りて斃れ、政治家が政務に斃れ、學者が學問に斃るるが如き、皆然らざるはなし。人既にその大道を闊歩す、固より老の將に至らむとするを知らず。老既に然り死も亦固より然るなり。無爲にして死を待つが如きは懦夫の事のみ。(德富蘇峰)

四 長 言

「多く言ふこと勿れ。汝が言と汝が心とこれ一ならば、汝終に舌頭に跳り舞ふ底の傀儡となるべし。汝が言と汝が心とこれ別ならば、汝が家裏の兒騎り母嗟する底の惡光景見るに堪へざらむ。舌に従つて動かば、芭蕉葉闊くして風にその幹を折らるる時あらむ。意を奉じて舌ひるがへらば、雞鳴狗盜の客を用ふるもの、畢竟英雄にあらじと罵られむ。」と、これ一説なり。

「多く言ふこと勿れ、多く言ふこと勿れ。意を傳ふる何ぞ必ずしも三寸の醜物を須ひむ。張儀の功を成せるは、巨口を張開して『吾が舌猶在りや。』といひしところにあつて、秦王面前に脣動き舌鼓せるのところにあらず。蘇秦の功を成せるは、機杼の音を聞きて俯首一番せしところにあつて、趙王殿裏に疾呼し絮說せるの時にあらず。」と、是亦一説なり。

傀儡
意を奉ず
雞鳴狗盜

機杼
俯首一番
絮說

賊郭
債鬼

「沈默は愚人の甲冑なり、奸者の城塞なり。明白白の心地、溫煦煦の
賊郭ならば、千言萬語するとも何の不可かあらむ。債鬼を怖るる者は
は門を閉づる堅く、醜婦を蓄ふるものは窗を開くを忌む。」と、是亦一
説なり。

老將は兵を談ぜず。良賈は深く藏す。言多きものは卑しとせられ、
語少きものは憚らる。言を以て招くは無言を以て招くに如かず。語
を以て斥くるは無言を以て斥くるに如かず。桃李そもそも何を言
ひて自ら蹊をなせるや。宗廟そもそも何を語つて人敢て瀆さざる
やと、是亦一説なり。

〔言を放つ、固より舌を拔かるるを辭せず。人を屠る、何ぞ身を亡ぼ
すを惜しまむ。物を愛すれば錢を費し、酒を喫すれば胃を傷ふ。加減
乗除し去るに、三もなく、四もなく、六も空しく、七も空し。好快活、風蒼
穹を渡り、濤大洋に騒ぐといへども、空に纖塵をも増さず、水に一滴

桃李云云
桃李不言下自成蹊。(史記)

盤古氏

をも減ぜず。汝語り、汝黙す、依然として是汝。我語り、我黙す、依然とし
て是我。火は潤さず、水は焚かず。盤古氏以來、人間奇事なし。汝詐らず
んば語も亦よし、黙も亦好し。我欺くべくんば、語も亦非、黙も亦非な
らむ。」と、是亦一説なり。

無用の長物

狎昵

〔無禮なる朋友は無用の長物なり。人多ければ事敗れ、樹多ければ
菓小なり。人益多ければ語語相反して怒を生じ、互に傷く。樹愈多け
れば枝枝相摩して火を發し、共に焚く。故に樹を栽うる度あり、人を
待つ禮あり。樹を栽うるは接近に過ぐるを忌み、人を待つは狎昵に
過ぐるを嫌ふ。接する者は伐るべし、狎るる者は遠ざくべし。樹は光
を樹より奪ひ、人は生を人より偷む。ただ度あり禮あらば、互に相長
じ、互に相助くるに足る。言は禮の聲なきなり、禮は言の形あるなり。
言にして禮に違はば殆い哉。」と、是亦一説なり。(幸田露伴)

五 病牀の花

山を分けて、谷一面の百合を飽くまで眺めようと、心に決めた翌日から、牀の上に仆れた。想像は、その時、かぎりなく咲きつづく白い花を、碁石のやうに點點と見た。それを小暗く包まうとする緑の奥には、重い香が沈んで、風に搖られる折折を待つ程に、葉は息苦しく重なり合つた。この間、宿の客が山から取つて来て瓶に插した一輪の白さと大きさと香とから推して、余は有るまじき廣廣とした画を頭の中に描いた。然るに、余が想像に描いた幽かな花は、一輪も見る機會のないうちに立秋に入つた。百合は露と共に摧けた。

人は病む者のために、裏の山に分入つて、此處彼處から手の届く幾莖の草花を手折つて來た。裏の山は、余の室から廊下づたひにすぐ登る便のあるくらゐ近かつた。障子さへ明けて置けば、寝ながら、椽側と欄間との間を埋める一部分を、鼻の先に眺めることが出来

た。その一部分は、岩と草と、岩の裾を縫うて迂回して上る小徑とから成立つてゐた。余は、余のために山に登る者の姿が、縁の高さを辭して欄間の高さに達する迄に、一遍影を隠して、再び反対の位置から現れて遂に余の視線の外に没して了ふのを、大なる變化の如くに眺めた。さうして、同じ彼等の姿が再び欄間の上から曲折して下つて來るのを、疎い眼で眺めた。彼等は必ず粗い縞の貸浴衣を著て、日の照る時は手拭で頬冠をしてゐた。岨道を行くべきものとも思はれぬ其の姿が、花を抱へて岩の傍にぬつと現れると、一種芝居にでもありさうな感じを病人に與へるくらゐ、釣合が可笑しかつた。彼等の採つて來てくれるものは、色彩の極めて乏しい、野生の秋草であつた。

或日、森とした眞晝に、長い薄が疊に伏さるやうに活けてあつたら、何處から來たとも知れない蟋蟀が、たつた一匹、大人しく中程に

とまつてゐた。その時、薄は蟲の重みで撓ひさうに見えた。さうして、袋戸に張つた新しい銀の上に映る幾分かの縁が、暈したやうに淡く且つ不分明に眸を誘ふので、猶更運動の感覺を刺戟した。

薄は大概すぐ縮れた。比較的長く持つ女郎花さへ眺めるには餘り色素が足りなかつた。漸く秋草の淋しさを物憂くおぼえ始めた時、始めて蜀紅葵といふ燃えるやうな赤い花瓣を見た。留守居の婆さんに錢を遣つてもつと折らして貰はうと言つたら、錢は要りません、花は預り物だから澤山は上げられませんと断つたさうである。余は此の話を聞いて、どんな處に花が咲いてゐて、どんな婆さんが、どんな顔をして花の番をしてゐるか、見たさに堪へなかつた。蜀紅葵の花瓣は燃えながら、翌日散つて了つた。

桂川の岸に沿うて行くと、幾らでも咲いて居るといふコスモスも、時々病室を照した。コスモスは凡ての中で最も單簡で、且つ長く保つた。余は、その薄くて規則正しい花瓣と、室に浮んだやうに超然として取合はぬ咲き具合とを見て、コスモスは干菓子に似て居ると感じた。範頼の墓守の作つたといふ菊を分けて貰つて來たのは、それから餘程後の事である。墓守は鉢に植ゑた菊を貸して上げませうかと言つたさうである。この墓守の顔も見たかつた。やがて、畠山の城址から「あけび」といふ物を取つて來て、瓶に插んだ。それは色の褪せた茄子の色をしてゐた。さうして其の一つを鳥が啄いて空洞にしてゐた。

かくして、瓶に插す草と花とが次第に變るうちに、季節は漸く深い秋に入つた。

日似三春永、心隨野水空。
牀頭花一片、閑落小眠中。

(夏目漱石)

訂修新撰高等讀本終

大正十三年五月二十五日印
大正十三年五月三十日發行 刷
大正十四年一月十五日訂正印刷
大正十四年一月十八日訂正發行

訂修新撰高等讀本

定價金四拾貳錢
臨時定價金六拾八錢

著修者 故佐 夕 政

明治書院編輯部

東京市神田區錦町一丁目十番地

株式明治書

取締役社長 鈴木友三郎

細谷祐

東京市神田區三崎町三丁目一番地

東京市神田區三崎町三丁目一番地

三郎

三

印刷者 印刷所

株式明章印刷所

東京市神田區三崎町三丁目一番地

三

電話神田(25)一四一四番

株式明治書院

發行所

振替貯金口座 東京四九九一一番



